地域に飛び出す公務員アウォード

２０１６

飛び公集

そのひたむきな公務員は　まだ日本にいるのです。たくさん。

地域に飛び出す公務員を応援する首長連合

平成 29 年 1 月 28 日

目次

アウォード概要 1

アウォード結果 3

２０１６エントリー飛び公

福山 智之（生駒市）「地域発見、再発見 フォトロゲイニング生駒」 4

加賀谷 辰夫（富山県）「ふるさとに誇りのきっかけづくり～評論家や傍観者でなく行動人に」 5

森 小百合、三輪 之、土屋 道子（関市）「ムーンライトコンサート実行委員会」 6

名畑 浩一（宍粟市）「「輪、笑、話、和」、4 つの「○」で地域の元気づくり」 7

小野寺 達弥（更別村）「若者が地域に根付く、住民主導による学生受入れ町おこし！」 8

竹田 有希（生駒市）「レンコン掘り選手権で池をキレイに！桃ヶ池環境改善プロジェクト」 9

小中 政治（大津市）、安藤 和人（長浜市）、山城 智恵子（湖南市）
「おうみ未来塾「仕事人と語ろう！」グループによる学社融合活動！」 10

小川 俊明（川口市）「避難所体験 学校に泊まろう！（火を囲んで防災ワークショップ）」 11

加藤 博之（三重県）「音楽で地域を元気に！」 12

神山 伸一（小平市）「ジャーナリスト楽校 in こだいら」 13

大内田 佳介（北九州市）「まちのナビゲーター増殖中！～シビックプライドがまちを変える～」 14

宮川 誠二（杵築市）「南こうせつさんの住む大分県杵築市を四畳半フォークの聖地に！」 15

小林 圭一（武雄市）「職業の特性を活かしたプロボノワーカーとしての活躍」 16

井上 元昭（嬉野市）「地域コミュニティサポーターチームによる「ガレージ朝市」支援」 17

小嶋 敦夫（三島市）「本気の映画製作を通じたまちづくり「みしまびとプロジェクト」」 18

大西 知芳（林野庁）「環境教育で人づくり「そそのかし屋は今日も人と人をつなぐ」」 19

有澤 聡明（須崎市）「いつでも・どこでも元気創造活動」 20

北村 淳子（長野県）「障がい者スポーツ指導員としての活動」 21

藤田 辰昭、田中 佐和子、岸 昌宏、樋詰 修己（高岡市）
「雅な音色とともに～150 年の地域文化の保存継承活動」 22

高橋 隼人（須崎市）「吾桑地域の青年団 BOKKENT（ぼっけん）での地域おこし」 23

野村 和義、和田 真人（豊明市）「空き店舗を活用した地域活性化プロジェクト～EGAO 家～」 24

助川 達也（茨城県）「東京と地元茨城をつなぐ「ツナグ茨城（若手茨城人交流会）」」 25

田所 佳奈（松山市）「松山のまちづくりの担い手育成を目指して」 26

明石 友貴（生駒市）「本でつながる、まちから全国へ！」 27

チームヴィーブルくん（合志市）
「市マスコットキャラによるまちづくり『チームヴィーブルくん』」 28

矢島 重信（長野県）「名勝・重要文化的景観「おばすて（田毎の月）」の棚田の保全活動」 29

瀬戸 要（佐賀県）「剣道交流活動、音楽普及活動、ＰＴＡ及び学校運営協議会委員活動」 30

池袋 耕人、西 博之（宮崎市）
「ごみ拾いからはじまる地域イノベーション「宮崎ベースキャンプ」」 31

前島 祐三（和光市）「『わこまち探検隊』」 32

浦崎 太郎（岐阜県）「豊かな学びの共同デザイン（地域資源と教職的技法のリンク推進）」 33

小足 雄高（銚子市）
「地元出身の若者とともにガイドブック「銚子人」発行とコミュニティづくり」 34

藤本 雅彦（加古川市）「「ゆるエコ」で「エコにこっ！」」 35

澤田 聡美（神崎町）「「発酵の里」非公認リアル・キャラ『お里』参上！」 36

大橋 志帆（太田市）「社会に居場所と出番を～地域の仲間と取り組むテレワーク推進活動」 37

中尾 雅幸（武雄市）
「人つなぎの旅～ 子ども・若者の夢実現の応援をテーマに地域に飛び出す公務員活動 ～」 38

晴佐久 浩司（農林水産省）「Let's Oh!ばんざい」 39

佐々木 寿（鳥取県）「「鳥取の絆」同窓生ネットワークでふるさと鳥取を盛り上げよう！」 40

米一 彰夫（北海道）「おもしろ道職員勉強会『ＤＯ！２１』」 41

服部 しづ子（三重県）「小学校へご奉公！活き活きと私ができること『おはなし隊の活動』」 42

※敬称略、掲載はエントリー順（以下同様）

アウォード概要

はじめに

自らの時間を活用して、地域づくり活動、自治会、PTA、消防団、NPO 法人といった組織の中で、住民のみなさんと一緒になって、また、ときには自らがリーダーシップを発揮して活動している公務員がたくさんいます。

今回２年ぶりに、地域に飛び出し住民と思いを共有しながら活動している公務員「飛び公（とびこう）」を表彰する「地域に飛び出す公務員アウォード 2016」を実施します。

職場や家庭における役割に加え、プラスワンとして活動する飛び公の優良な取り組みを称賛することで、公務員や地域の住民の飛び公への関心が高まり、地域に飛び出す職員が増えること、また、飛び出す経験が自治体の組織風土改革のきっかけになることを期待しています。

応募資格

社会貢献活動、地域づくり活動、自治会、PTA、消防団、NPO 法人などが取り組んでいる活動に貢献している公務員（他の組織への出向者を含む）または公務員のグループ（自薦及び他薦。但し、他薦の場合は被推薦者の同意を得てください。）

応募要件

（1）2017 年 1 月 28 日（土）に千葉県酒々井町で開催される第 6 回地域に飛び出す公務員を応援する首長連合サミットでの発表（20 分程度）が可能であること（録画動画による発表でも OK です。）

（2）応募資料（個人情報を除く）を一次審査のために公開すること及び「飛び公集」として取りまとめ Web 等で公開することに同意すること

審査について

（1）審査プロセス

エントリー期間	一次審査	二次審査	発表・表彰
8 月 20 日（土）～9 月 30 日（金）	**10 月 11 日（火）～11 月 11 日（金）**	**11 月 25 日（金）～12 月 23 日（金）**	**1 月 28 日（土）**
全国から募集	**ウェブ投票及び当連合加盟首長の投票により 10「飛び公」程度を選出**	**審査委員審査により 4「飛び公」程度を選出**	**第 6 回首長連合サミット in 千葉にて発表・表彰**

（2）審査の方法

【一次審査】

- エントリーされた 39「飛び公」の中から、ウェブ投票及び当連合加盟首長の投票により 10「飛び公」を選出
- 審査参加首長 49 名、ウェブ投票数 8,488 票

【二次審査】

- 審査委員審査により 5「飛び公」を選出

（3）審査基準

- 成果・効果･･･地域の課題解決や活性化などにどれだけ貢献しているか、飛び公としての経験がどのように公務に役立っているか
- チャレンジ性･･･変革や改善に富んだ活動になっているか、オリジナリティの高い活動になっているか
- 協働性･･･多様な主体が、互いにノウハウなどを出し合った活動となっているか
- 持続性･･･持続可能な活動となるような工夫がされているか

（4）審査委員（敬称略）

- 平井 伸治 鳥取県知事
- 谷畑 英吾 湖南市長（滋賀県）
- 小坂 泰久 酒々井町長（千葉県）
- 都竹 淳也 飛騨市長（岐阜県）

主催

地域に飛び出す公務員を応援する首長連合

協力

酒々井町（千葉県）

アウォードと首長連合のウェブサイトの紹介

アウォード特設 HP　http://t-k-award. sakura.ne.jp/
首長連合 HP　http://tobidasu-rengo.blogspot.jp/

アウォード結果

一次審査通過者

福山 智之（生駒市）「地域発見、再発見 フォトロゲイニング生駒」

名畑 浩一（宍粟市）「「輪、笑、話、和」、４つの「○」で地域の元気づくり」

小野寺 達弥（更別村）「若者が地域に根付く、住民主導による学生受入れ町おこし！」

小嶋 敦夫（三島市）「本気の映画製作を通じたまちづくり「みしまびとプロジェクト」」

大西 知芳（林野庁）「環境教育で人づくり「そそのかし屋は今日も人と人をつなぐ」」

野村 和義、和田 真人（豊明市）「空き店舗を活用した地域活性化プロジェクト～EGAO 家～」

明石 友貴（生駒市）「本でつながる、まちから全国へ！」

矢島 重信（長野県）「名勝・重要文化的景観「おばすて（田毎の月）」の棚田の保全活動」

池袋 耕人、西 博之（宮崎市）「ごみ拾いからはじまる地域イノベーション「宮崎ベースキャンプ」」

澤田 聡美（神崎町）「「発酵の里」非公認リアル・キャラ『お里』参上！」

アウォード受賞者

名畑 浩一（宍粟市）「「輪、笑、話、和」、４つの「○」で地域の元気づくり」

小嶋 敦夫（三島市）「本気の映画製作を通じたまちづくり「みしまびとプロジェクト」」

野村 和義、和田 真人（豊明市）「空き店舗を活用した地域活性化プロジェクト～EGAO 家～」

矢島 重信（長野県）「名勝・重要文化的景観「おばすて（田毎の月）」の棚田の保全活動」

池袋 耕人、西 博之（宮崎市）「ごみ拾いからはじまる地域イノベーション「宮崎ベースキャンプ」」

地域発見、再発見 フォトロゲイニング生駒

福山 智之（生駒市 上下水道部総務課営業係）[奈良県]

フォトロゲイニングとは誰もが知っている観光名所や史跡、神社仏閣だけでなく、地域にある珍しいもの、面白いもの、美味しいグルメスポットを市内外からの参加者にＰＲすることができるスポーツです。
それぞれのポイントに得点を付け、地図をもとに制限時間内にどれだけ回り、どれだけ得点を稼ぐことができるかを競うもので、体力だけでなくチームそれぞれのポイントを廻る作戦にも左右されるため、老若男女みなさん楽しめます。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

大会で使用する地図と
チェックポイント一覧

　私は以前 TJAR という大会の参加を目指していました。その大会の情報を集めている中で、同じように大会参加を目指している方のブログを見つけ、そのブログをチェックするようになりました。日々のブログチェックの中で、石神井で開催されたフォトロゲの記事を見た時、言いようのないワクワク感を感じると共にこれは絶対に面白い！と感じました。
実は、生駒市は大阪のベッドタウンとして発展してきたため、県外就業率が全国でもトップレベルです。このことを知った時に、『生駒市に住んでいながら、生駒を知らない人がたくさんいるのかもしれない。生駒市のことを市民の皆さんに再発見してほしい』と常々感じていたこともあり、このイベントは正に私の思いを叶えてくれるイベントだと思いました。
そして 2012 年 8 月に念願の TJAR 参加＆完走を果たした私は、その年の 10 月から開催を目指して動き始めました。
「そのイベント楽しそうやん、やろう！」と前向きなメンバーが 10 人以上集まってくれたこともあり、無事第 1 回目は 2013 年 5 月に開催することができました。
その後毎年継続して開催できており 2017 年には第 5 回目を開催予定です。

地元店舗のご協力♪お店も
参加者も主催者も winwinwin

アピールポイント

(1)成果・効果
第 1 回目から定員を大きく上回る参加希望者があり 2016 年の第 4 回目は 360 名、これまでの参加者は延べ約 1200 名の参加となっています。その 8 割以上が生駒市外からの参加者であり、北は宮城県、南は鹿児島県まで様々な地域からこのイベントの為に来訪し、生駒市のことを知っていただけました。近隣の大阪府や京都府、兵庫県からの参加者の方は、廻りきれなかったチェックポイントを探しに改めて来訪するケースもあり、一度のイベントで複数回の来訪が期待できる珍しいイベントです。また、生駒市民の参加者からは「知らない生駒を発見できた」という目論見通りの感想をいただいています。

チェックポイントでパシャッ

(2)チャレンジ性
イベントに協力をいただくために、地元のお店や全国展開している企業等へ飛び込み営業し、思った以上の協力を得ることができました。 第 4 回目大会においては、他のスポーツイベントでは例を見ない託児サービスを試験的に実施し、5 名の利用がありました。潜在的な需要があると感じています。
(3)協働性
毎回、市内外へＰＲしたいお店を数店舗ピックアップし、チェックポイントとして選定し参加者への周知を図ることを約束した上で参加賞や来訪者への〝おもてなし〟を用意していただいています。 過去の〝おもてなし〟は、日本酒試飲、アイスティ、パン、サブレ、クッキー等で暑い時期の開催なのでアイスティは特に喜ばれています。また、参加賞には幻のレインボーラムネを必ず入れるようにしているので、それが目当てで参加される方もおられます。
(4)持続性
このイベントはチェックポイントを選び、地図を作製することができれば開催できます。生駒市に限らず、どの地域にもチェックポイントは多数存在していると思います。それらのポイントの入れ替えや、エリアを変えることで参加される皆様に飽きられることなく続けられると考えています。 また、スタッフの負担が少ないという面でも持続的に開催できている理由の一つではないでしょうか。

ふるさとに誇りのきっかけづくり～評論家や傍観者でなく行動人に

加賀谷 辰夫（富山県議会事務局 総務課）

仕事とは別の２枚目の名刺を持ち、地域の魅力に気づき、誇りや愛着を持てるよう学校等で講演するとともに、受講者が更に講師となる取組を県民カレッジ自遊塾で実践。世界遺産の棚田のコーリャク隊員として、伝統野菜の赤カブや世界遺産米のボランティアを行う。市の地方創生委員会などで一委員として参画。県校友代表、保証人会副会長などの顔もあり、就職相談会や卒論審査も担当。新聞の寄稿や、ふるさとの魅力を文学として発表。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

・昭和 62 年、就職後すぐ同窓会活動などに参加(県校友代表など。都内で就職相談講師・卒論審査)
・平成３年、20 代に父が他界し、集落の絆や支え合いを実感し、評論家や傍観者ではなく、現場重視の行動人として、町内会はじめ地域活動など実践
・19 年に中山間地域の活性化指針策定をきっかけに、ふるさと子ども夢学校(農水・総務・文科省の子どもプロジェクト)の名づけ親となり、世界遺産五箇山の棚田ボランティア活動に家族と関わる
・10 年から北陸新幹線建設促進運動や薬業振興を担当し、22 年からふるさとの誇りを伝える講演(富山の DNA である薬と富山、富山の魅力、御朱印の見方など)し、26 年から受講者を知のおもてなしができる講師に育てる講義を、県民教授として実施
・22 年から県報を担当し、書く聴く話すことを通じ、四季のふるさと文学を綴る(共著５冊)
・２～３年の人事異動で仕事をリセットせず、公と民、双方理解できるので、市の一委員(地方創生、行政改革、国土利用計画、社会教育施設統合等)として参画
・新聞、ラジオなどマスコミに取り上げていただき、ふるさと意識が高まり、輪が広がる。(22 年～県紙など新聞投稿 74 件)

自分ならではの言葉で、
熱い想いを伝える

8月下旬、五箇山合掌の里付近の畑にオーナーやコーリャク隊が種をまいた赤カブが２か月余りで立派に育ち、寒暖の差で鮮やかな赤紫色になりました。
赤カブオーナー事業「みんなで農作業の日・収穫作業」には約70人のメンバーが参加。約10a の赤カブ畑に入って、実が締まった赤カブを土の中から次々と引き抜いていくと、用意されたコンテナは、あっという間にいっぱいになりました。

中山間地域で支え合い、
農ある暮らしで収穫を喜ぶ

マスコミで取り上げられ、
接点のなかった人との輪が広がる

アピールポイント

(1)成果・効果
・27 年の北陸新幹線開業に向け、講演(H27 参加者 1000 名以上)・通年講義(２時間×６～７回×３年)を通じ、県民の知のおもてなしやふるさとの魅力の気づき・再認識などの一助になる ・26 年、ご当地検定「越中チャレンジ」上位合格者からなる「とやまふるさとの会」を設立し、ふるさとに熱い講師の講演技術向上 ・世界遺産の菅沼合掌集落では数十年耕作されていなかった農地に赤カブを育て、現在チューリップ畑に生まれ変わる ・25 年、飛び公経験が難航用地交渉に大いに役立つ(公営企業管理者表彰) ・私の地域活動について、知事や議員も理解。
(2)チャレンジ性
・県民が講師となるユニークな通年講座講師に現職公務員は希有、さらに招聘が難しい外部専門講師(製薬会社取締役、神社仏閣精通者など)を招くなど精力的活動により深く情報交換 ・27 年、市議会に地域の誇りに関する陳情者を提出し、全会一致で採択 ・21 年から毎年２月に大学の最優秀論文を選定するため、推薦された政治分野の論文を熟読し、審査会に出席する公務員は珍しい
(3)協働性
・棚田の価値観等を後世に伝える取組では、農業公社や多世代のボランティア仲間、ふるさとの活動では、依頼者や受講者、同窓会や保証人会の活動では大学や役員、市への参画では各種団体など様々な方と関わるとともに、マスコミの皆さんとも協力、支援をいただく ・県内文化人の一人として、知事など 300 人出席する新年懇親会などで更なる理解を求める
(4)持続性
仕事・ふるさと・妻をはじめ家族を愛し、人や本との出会いが豊かな人生に不可欠と考えており、上司や同僚の理解や協力を得ながら、今後とも活動を継続し、飛び公候補者に数年経てばこんな感じと示せるモデルを目指す。どの活動も、地域振興、生きがい、人不足など様々な切り口があり、期待の大きさを実感しているので、理解者や協力者を増やしていく。そのためにはふるさとへの熱い想いを評論家や傍観者でなく行動で示す。

ムーンライトコンサート実行委員会

森 小百合、三輪 之、土屋 道子（関市）[岐阜県]

平成 *17* 年の市町村合併を機に、平成 *18* 年秋から音楽の魅力と地域の魅力を伝えていこうとムーンライトコンサート実行委員会を組織しました。武儀地域が誇る文化遺産「高澤観音」を舞台に選び、毎年コンサートを開催、今年で *11* 回目を迎えます。コンサートを開催することで、自分たちの発表の場を提供していくと同時に「高澤観音」をＰＲすることで地域の活性化に繋げています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

実行委員会に所属する職員は、地元音楽サークルの合唱メンバーであり、週１度の練習に励んでいたが、年々合唱メンバーが退会していくなど、将来に不安を抱えていた。しかも音楽発表の場としては年に１度行われる町の文化祭のみで、サークルの活性化やレベルアップをしていく現状には乏しいものがあった。

そこに平成の大合併により、増々サークル活動の存続の危機を感じていました。合唱サークルには市職員も加わっている事から、町の活性化とサークルの活性化を同時に解決できないかと、メンバーに話を持ち掛け全員一致でムーンライトコンサート実行委員会を立ち上げ、現在に至っています。

このコンサートは、企画から運営・会場の設営・出演までを手作りによる開催です。特に女性が多い事から、会場設営など力のいる仕事は地域の男性や男性職員も加わって年々協力者が増えています。

会場の高澤観音は、山の中にあり周辺集落とは隔絶されており騒音対策等の問題は全くないが、イベントを開催するには非常に厳しい条件で、当初はイベントの開催に対して冷ややかな面もありましたが、回を重ねる事により活動の趣旨が地域で受け入れられてきたと感じている。

２０１６開催チラシ

コンサート風景

アピールポイント

(1)成果・効果

元来お寺であることから、お参り客が主で、知る人ぞ知る。そして高齢の方が多いが、コンサートを開催する事で、若い人達にも関心を持って頂くことができたことや、いち実行委員会のイベントであったが、地域の行事として認識していただけるようになり、活動を手助けして頂くひとも増えてきた。

(2)チャレンジ性

高澤観音は美濃の清水と言われ、京都の清水寺に類似した建造物であることから、京都清水寺で行われるジャズコンサートを参考に、アマチュアからプロも満足のいくステージを作ってきた。 また、ステージには電子ピアノでは無く、グランドピアノを搬入している。素人集団の運営ではあるが、来場者に満足のいくステージを創っていく事に拘っている。

(3)協働性

会場の高澤観音は、県道から５kmほど山の中に入ったところであり、カーブも多く見通しの悪い道である。このため、コンサート前には地元の建設業者等がボランティアで道路沿いの草刈り等を行って頂き、安全確保に努めていただいている。 また、高澤山奉賛会の皆さまには当日、駐車場の交通整理なども自主的行っていただいている。

コンサート風景

(4)持続性

平成１７年市町村合併後の平成１８年に始めて以来今回で１１回目を数える事ができた。 単なる趣味の延長だけに止まらず、地域が自慢できるものの一つとして、更にクオリティの高いものを目指していく。

「輪、笑、話、和」、４つの「○」で地域の元気づくり

名畑 浩一（宍粟市 企画総務部）[兵庫県]

メイプルタウンクラブは、地域の活性化と交流促進を目的に、地域づくりイベントの企画・運営や地域の他の団体と連携しながら、子どもから高齢者まで、笑顔で楽しく過ごせる時間と空間を提供しています。また、地域外にも飛び出し、地域の産品 *PR* や宍粟市の知名度向上に取り組んでいます。もちろん、活動を通じクラブ員の親交を深めながら、自己啓発と資質を高め、社会人としての成長を目指しております。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

当クラブは、合併前の旧波賀町でサマーミュージックフェスティバルを開催するため、その運営母体として平成５年に結成した団体で、クラブ名は町木の「かえで」に由来します。ミュージシャンを招いた夏のコンサートは 10 回を数えましたが、節目を機に新たな活動を「地域の元気づくり」に舵をきり、地域に根ざした事業を展開することとしました。
過疎化にあって地域が寂れていく中、かつては森林産業で栄え娯楽の中心に劇場があったことを聞き「懐かしの映画会」を皮切りに、若者の流出で盆踊りが出来なくなった地域に出向き「出前盆踊り」を実施しました。また、合併以降途絶えていた「ふれあい運動会」の復活や「はがリンピック」と題し地域スポーツの祭典を開催し、400 人でバトンするフルマラソンでは日本記録を上回りました。
「杵」と「ウス」による手つきの餅つきが少なくなったことから「餅つき隊」を平成 18 年に結成し、各種地域イベント会場や道の駅などで餅つきを実演し、平成 23 年には東日本大震災の被災地である石巻市の避難所へ餅つき支援に出向きました。
今後は、地域団体と更なる連携による元気なまちづくりにさらに寄与したいと思います。

「波賀リンピック」
400 人バトンマラソン

「餅つき隊」被災地支援

アピールポイント

(1)成果・効果
平成 23 年から３年間実施した地域の産品を使った食イベントコンテスト「S 級グルメグランプリ」で２回最優秀賞を獲得したグループは、自慢の「巻きずし」を看板メニューに食堂を昨年オープンされ地域の人気店となり、出前盆踊りを実施した地域では、今では自分たちで祭りを企画運営されています。 クラブ員も今では行政職員 12 名を含め 41 名となり、事業運営で培った企画力と交流で広がった人脈を公務に活かしています。
(2)チャレンジ性
クラブは、「ゆめづくり」「まちづくり」「ひとづくり」と壮年メンバーで構成する「WA（輪、笑、話、和）づくり」の４つの委員会で構成され、年間事業をそれぞれの委員会が企画し、連携して実施しています。 最近、「餅つき隊」の活動が口コミで広がり、他市の地域イベントや祭り、結婚式の余興などにも声をかけていただいています。今後、餅つきをはじめ地域の食文化をテーマにした広域イベントを企画したいと考えています。
(3)協働性
町内には地域活動を行うグループが個々に事業を展開していましたが、28 年３月に「波賀元気づくりネットワーク協議会」を立ち上げ、情報交換と共通の目的である地域の元気づくりを目指して、11 団体が協働して活動を開始しました。 設立総会では、それぞれの団体の課題や悩みなど意見交換を行い、事例発表ではお互いが刺激を受けさらなる連携を確認しました。

「夏の例会」意見交換会

(4)持続性
クラブには会長と４人の副会長を、４委員会にはそれぞれ委員長と副委員長を配し、年間計画のもと事業を展開しています。運営資金は、クラブ員の年会費と「餅つき隊」事業などの寄付金やイベント委託料などで自立した運営をおこなっています。　これまで 23 年間の活動を振り返ると、活動のあとは必ず皆で食事をとり慰労をおこなったことや、参加できる人が参加できる形で無理なく活動をおこない、「自分たちも楽しむ」ことを一番のモットーとしたことが長続きの秘訣であったと考えます。

若者が地域に根付く、住民主導による学生受入れ町おこし！

小野寺 達弥（更別村 産業課）[北海道]

若者の人口流出、農家の人手不足、地域行事等の担い手不足。これらの課題を解決するため、住民有志で協議会を設立。
田舎暮しや農業を志す学生は、無料で離農住宅の田舎暮しを満喫して農業体験の実務研修を受ける。研修期間以外は、地域行事に参加し町を盛り上げ、特産品開発にも挑戦する。
全国から訪れる大学生が「第二の故郷」として根付くことを目標とし、大学生、農家、地域住民全てが *WinWin* となる町おこしを実現。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

　ある意見交換会で大学生と出会い、田舎暮らしや農業を希望する学生が増加するなか、学生と農村地域双方に何か良い取り組みができないか相談を受けたことがキッカケとなる。大学生との連携や地域での受け入れ方法を検討のうえ、住民有志による協議会を設立し、協議会にて農業体験研修の受け入れ管理等を行う。
農家は、繁忙期の深刻な人手不足を、大学生の農業研修によって解消できることから協議会運営費を負担し、協議会にて学生たちの滞在費（旅費交通費、家賃、水道光熱費、食費、地域交流費等）を確保する。これにより学生たちは無料で農業研修を受けることができる。
また多くの学生が地域に滞在することは、消費額の増加や活気づくりに有効であるため、休日等には様々な地域行事への参加機会を提供し、住民と積極的な交流を図っている。
学生たちの滞在（約２ヶ月）により、農家及び地域住民にも町を元気にしたいとの意識が強くなり、更なる発展も期待されている。
この取組みは地元新聞社でも取り上げられ、研修希望校は３校に増え、また近隣市町村からも連携の問合せがあり、広域での検討も進めている。

受入農家及び
地域住民との交流会。

村広報誌に掲載。
地域住民にも認知。

地元新聞に掲載。
他市町村からも問合せが増加。

アピールポイント

(1)成果・効果
大学生の農業に対する熱い想いに地域住民が応える、農業繁忙期の人手不足を解消できる、行政からの補助金を受けずに健全経営できる、そして何より嬉しいのは大学生たちが「更別村を第二の故郷」として、農業研修以外の期間にも訪れてくれることである。また大学生たちによる特産品開発の要望もあり、地域活性化の突破口として、さらには農業者の担い手不足にも貢献したい。 実績～平成 27 年度　大学２校９人参加　受入農家９戸　　平成 28 年度　大学３校 15 人参加　受入農家 12 戸
(2)チャレンジ性
地域住民の賛同者を集めるのに大変苦慮した。 当初は、役場内で協力者を模索したが実現は難しい、忙しくて無理との反対意見が多く、職場内での協力者確保は難しいと判断し、個人活動にて住民との直接連携に踏み切った。住民主体での取り組みは過去に例が無いため、休日ごとに農家等に訪問説明し、住民有志による協議会を設立した。農業研修が主体となるが、商工業企業の賛同者も得られた意味は大きい。
(3)協働性
農業研修（畑作、酪農）を受ける学生の真剣な眼差しに、農家との信頼感が生まれ、農家自らが行動する協働と連携が進んでいる。また学生たちの様々な行事参加（夏祭、秋祭、各イベント、チーズづくり体験等々）により、地域住民との信頼感も生まれ商工業企業からも応援を受けている。この取り組みにより地域全体が自らの町を元気にしたいという想いが生まれており、年齢や業種を問わず連携できた協働の成功事例である。
(4)持続性
学生たちが農業研修のみならず、地域住民と交流することが成功の要因であり、更別村を第二の故郷と意識されてきた。学生たちは、既に他大学との連携により平成 29 年度計画にも着手し、継続できる体制づくりを進めている。 協議会についても賛同者は増加しており、また他市町村から連携を要望する相談も受けている。将来的には、広域連携も視野に入れ、法人の立ち上げも検討する予定である。

レンコン掘り選手権で池をキレイに！桃ヶ池環境改善プロジェクト

竹田 有希（生駒市 地域活力創生部環境モデル都市推進課）[奈良県]

若者が参加したいと思えるイベントの創出を目的に、あべので活動する若者団体「あべ若」が進めるプロジェクトです。地域の象徴である桃ヶ池は、昔は泳げるほどキレイでしたが、最近では水が汚くなり、臭いもひどくなっています。池にはレンコンが生息していることに着目し、レンコン掘り調査と、不法投棄されたごみの引き揚げを選手権としてイベント化。優勝者には賞金と特製ふんどしを贈呈。若い世代から関心を集めています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

生駒市入庁前の平成 25 年、居住地である大阪市阿倍野区で「若者が担うまちづくり推進事業」が始まりました。区内に関わる 18～39 歳までのボランティアメンバーを集め、あべのの魅力を発信するイベントを企画・実施するものです。
もともと地域活動に参加していましたが、同年代の人が全くおらず、若い人がもっと地域に関心を持てばいいのに、という想いがあったため、公募メンバーになりました。
事業が実施された 3 年間で様々なことを学びました。
①多くの若い人は地域のことを知らないこと　②若い人が地域活動に関わろうとしても、従来通りの『下働きから』を求められると離れていくこと　③若い人が新しく始めることに対して、一緒に汗をかいてくれる地域が少なからず存在すること
また、あべのでバルの仕組みをつくったり、毎年大勢で賑わう町おこしイベントを立ち上げた経験を持つメンバーからは「面白いことであれば若い人は関心を持つ」ことを教わりました。
事業が終了した今年の春、3 年間の経験と気づきを無駄にしたくないと思い「あべ若」代表となり、若い人が面白いと感じながら参加することで地域課題解決を目指す当プロジェクトに力を注いでいます。

選手権出場者は自分のカゴにレンコンとごみを入れていきます。

優勝者に贈呈される特製刺繍入り赤ふんどし。

アピールポイント

(1)成果・効果
【地域の課題解決・活性化への貢献】 プロジェクトのキックオフ的位置づけで開催したイベントでは、子どもを対象にした池周辺のごみ拾いクイズラリーに加え、若者が楽しめる飲食ブースの設置とアコースティックライブを実施。約 150 名が参加しました。これまで地域課題に関心がなかった層に着実にアプローチし、マスコミからも注目されています。 【経験がどのように公務に役立っているか】 一区民として行政との協働事業に参加することで、住民としての活動経験と感覚、行政との距離感を学びました。生駒市入庁 1 年目に、市の呼びかけで市民ボランティアグループを立ち上げる事業の担当になり、その経験と感覚は大いに役立ち、市民との信頼関係を築けていると思っています。
(2)チャレンジ性
池の環境改善は難しい課題であり、池を所有する行政とも意見交換をしながら進めています。行政と連携するためには「公共性」とのバランスが大事です。いかに公共性を意識してプロジェクトを進めていくか、公務員である自身の腕の見せ所だと思っています。
(3)協働性
【プロジェクトの協働における多様性】 プロジェクトは、桃ヶ池がある地元町会、桃ヶ池公園愛護会、阿倍野区役所と密に連携を取りながら進めています。また、地元在住で専門的知見を持つ研究者の方にも定期的に助言をもらっています。 【メンバーの多様性】 あべ若の大きな強みはメンバーの多様性であり、公務員である自身以外に、飲食店等の経営者や大学院生もいます。公務員だけの世界ではなかなか出てこない柔軟なアイディア・発想が生まれています。

憩いの池　僕らで浄化
阿倍野の若者グループ
アシ植え・ごみ引き揚げ

読売新聞にも載りました！

(4)持続性
区の事業でなくなった今年度から、地域のお祭りでの屋台出店で収入を得るなど、継続的にイベント経費を賄える仕組みをつくっています。また、イベント実施時には公園愛護会などの地縁団体と連携するほか、地域の専門学校等にも声を掛けてボランティアメンバーを集めるなど、新たな関与者を増やしながら活動を継続しています。

おうみ未来塾「仕事人と語ろう！」グループによる学社融合活動！

小中 政治（大津市）、安藤 和人（長浜市）、山城 智恵子（湖南市）[滋賀県]

子ども達が将来就きたい職業や地域の中で様々な仕事で活躍している職業人を学校や公民館に”仕事人”として招き、仕事をしていて楽しいことやつらいこと、目標にしていることや、どうしたらその職業につけるのかなどを本音で語っていただきます。
普段接することのない仕事人から、仕事に対する様々な本音の話を聴いたり、体験してみることによって、自分の将来への幅広い職業観を養ってもらうことを目的に活動しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

おうみ未来塾は、初代塾長の日高敏隆京大名誉教授が、『行政や企業だけでは解決できない地域課題に取り組むリーダー「地域プロデューサー」が育つ塾』を目指し、1999年に創設されました。おうみ未来塾「仕事人と語ろう！」グループは、この第10期生の有志により結成されたもので、活動の原形は、神戸市のＮＰＯ法人が休日の学校の空き教室を利用して実施していた同名の親子参加型のイベントです。このイベントに”市役所の仕事人”として招かれた筆者が、是非滋賀県でも取り組みたいと感じ、これを塾内で提案してみたところ、賛同者が集まり活動が始まったものです。滋賀県は、当時の全国学力・学習状況調査（国立教育政策研究所）の中で、将来の夢や目標を持っていると答えた児童・生徒の割合が全国第45位(小学6年生(全国)70.0%,(滋賀県)66.3%,中学3年生(全国)43.7%,(滋賀県)39.4%))であったことから、この順位をベンチマークに、10年後、20年後には全国上位に位置していることを目指して取り組んでいます。小中学校からの依頼件数は、初年度の2校から年々増加し、昨年度は26校からの依頼を受け、実施しています。

滋賀県立水口東中学校
（ロボット技術者）2010.6.16

彦根市立南中学校
（パティシエ）2014.1.24

アピールポイント

(1)成果・効果
平成21年の在塾時に活動を開始してから7年が経過しましたが、この間の依頼件数は年々増加し、現時点での実施件数は延べ学校数96校、動員された仕事人は309名、受講した生徒・児童数は1万名を超えています。また、児童・生徒だけでなく、親子で受講することにより、家庭内での職業観の醸成や、多様な職種の仕事人が来校することにより、学校の環境改善にも活かされます。講師を務めた仕事人、授業に立ち会った教師からも大好評です。
(2)チャレンジ性
阪神淡路大震災後の神戸市で創設されたＮＰＯ法人が取り組むまちづくり事業が原形となる活動であることから、東日本大震災(2011.3.11)や熊本地震(2016.4.16)により被災した地域の復興施策として、地域コミュニティーの再興や地域の将来を担う子供たちの夢をサポートするために活用されることを提案しています。また平成24年以降、えふえむ草津(78.5MHz)のイブロケフライデーにも毎月2名の仕事人にゲスト出演していただいています。
(3)協働性
県教委主催の学校支援メニューフェアで小中高等学校の担当教諭向けにグループの活動の趣旨や期待できる効果、実施事例などを紹介し、県教委や学校からの協力依頼があれば、依頼先との打ち合わせを行い、実施行程、授業の趣旨や形式、職種の選定等のコーディネートを行っています。多種多様な仕事人への依頼や関係者との連絡調整など、教育行政、ＮＰＯ、学校現場、家庭、地域、産業界の協働があってこそ成立し得る取り組みです。
(4)持続性
滋賀県は、平成19年度から県内のすべての公立中学校（100校）で5日間の職場体験「滋賀県中学生チャレンジウィーク」に取り組んでいます。当グループは、その関連授業としての職業人講話やマナー講座などのキャリア教育支援を依頼されるケースが多く、県の取り組みと当グループのミッションが相乗する限り連携授業は継続されます。リピート校が多いことも特徴の一つです。

「仕事人と語ろう！」
グループ活動分布図 2016.6.3 現在

避難所体験　学校に泊まろう！（火を囲んで防災ワークショップ）

小川 俊明（川口市 企画財政部企画経営課企画係）[埼玉県]

日頃から「地域教育」や「コミュニティ」を意識している。地元の小学校のＰＴＡ会長に就任したのを機に、考えに賛同してくれた子ども会役員、隣接する児童館職員と企画した。普段通っている学校は避難所となり、他者との関わりなしでは生活できない状況に子どもたちを置いて、人との共同の大切さを、相互扶助体験を通じて感じてもらう、通常の防災訓練とは一線を画す、主体的な体験の場を創った。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

通年事業をこなすのではなく、自らが描く企画を実現したい思いから、校長、学校の先生、地域の役員さんに事あるごとに話をしながら準備を進めた。運動会、お祭り、講演会などが地域と学校を繋ぐ行事として実施されているものの、どこか形骸化し、肝心の子供、先生、保護者、地域の方々が主体的に活動をする場としては、少し物足りなさを感じていた。震災から２年が経過し、被災地はまだ復興中という状況にありながら、私たちの日常は震災前の不自由のない生活に戻りつつある。
また、「子供達の体験の場を創る」という観点から言えば、すべてが準備され、お客さんとして参加するのではなく、自らも一緒に作り上げるという体験をしてもらいたいという思いを伝え、地域活動のキーマン数名と共に学校に働きかけ、ようやく実現することができた。災害時、学校は避難所となる。満足な食料もなく快適な環境ではないことを実際に体験してもらう企画の性質上、参加者の安全や学校の管理責任などを危惧する声も地域（町会）からあがったり、学校も難色を示していた。しかし、結果として教職員、参加者からは親子ともに貴重な体験ができたという声をたくさん頂くことができた。

DSCF6314

DSCF6346

DSCF6365

アピールポイント

(1)成果・効果
　活動のきっかけでも述べたとおり、十分な設備が無い学校という場所で、他者とともに一夜を過ごすことによって、他者を思いやる、気遣うことの大切さを感じてもらえた。
　特に、一晩宿泊した子供たちが、翌朝に積極的に後片付けをしていた姿が印象的だった。
[波及性]　企画段階の心配は大きかったゆえ、また、教職員が全面的に協力してくれたことも相まって、学校、参加者、地域との関係性が深まった。
(2)チャレンジ性
　学校に宿泊するという行為自体が、防犯面、管理責任などの面から難しく、これまで宿泊行事を行っていた学校もやめてしまったところもある。学校、PTA主催と銘をうって実施することのハードルが非常に高かった。そこで、区の防災担当課に防災訓練として位置付け、アルファ米などの非常食を参加者分用意してもらい、「防災訓練の一環」というねらいを加えた。
　また、夏開催のため、参加者の暑さによる健康面なども懸念されたが、不自由な状況を体験するということで了承を得た。
(3)協働性
　実施したワークショップは、アイスブレイクにバースデー・ラインなどを導入し、グループで協力して段ボールを使った思い思いの家を創る、火を起囲んでのキャンプファイヤー、屋外で非常食を食するなど、常に他者との関わりを念頭にコンテンツを用意した。
(4)持続性
　実施後、校長先生がさっそく参加者、参加教員にアンケートを実施してくれた。できれば来年も続けて欲しいという声も多く、次年度以降の開催、ならびに近隣の学校でも実施して欲しいと思う。
（ただし、宿泊行事の実施や、キャンプファイヤーなど、単体では実施している学校はある。）
　全体の所感として、段ボールＷＳは、大人、先生、子供もも夢中になって作品づくりをしている姿が印象的だった。

音楽で地域を元気に！

加藤 博之（三重県 病害虫防除所）

仕事がきっかけで御浜町尾呂志地域の農家さんたちと親しくなり、趣味の音楽が高じて毎年音楽会を開いています。当初は過疎地域を応援する気持ちもありましたが、今では逆に元気をもらいに演奏しにいくような状態です。

もともと農家さんたちのグループが熱心だったため、組織立ち上げの平成 *19* 年度以降、年々地元の動きも活発になり、多方面へ広がりを見せています。この音楽会もその柱の一つとして好評を博しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

お客さんの様子

県に就職し７年目に紀州地域に異動になり、はじめて農業の現場担当（農業改良普及員）になりました。主に水稲や小麦の栽培指導や「集落営農」の推進が業務内容でしたが、三重県南部の紀州地域は特に過疎化の進んだ地域で、あちこち現地を歩くと本当に山にのまれてなくなってしまいそうな集落もありました。県内でも地域によりさまざまな状況がありますが、感覚的には、山間地や過疎地域であるほど田んぼと地域のつながりが深く、田んぼを維持することがそのまま集落機能や集落そのものの維持につながっていると感じました。

そんな中、御浜町の尾呂志という地域で、ある農家さんのグループと出会い水稲栽培の技術指導などを行う過程で、尾呂志『夢』アグリという組織立ち上げにも携わることができました。特にこのグループの方は熱心で、すぐに打ちとけて個人的にも親しくなりました。今振り返ると、そのグループから忘年会に誘われ、その場で趣味のビオラを弾いたのがこの活動の始まりだったと思います。

演奏の様子

異動でこの地域を離れた後もおつきあいが続き、気の合う楽器仲間にも呼びかけて、バイオリンやチェロ、フルートなどと一緒に音楽会を企画することになりました。

アピールポイント

(1)成果・効果

これまでに６回の演奏会を行い、毎回大変喜ばれています。普段は座談会などを開いても 20 名ほどしか集まらない地域ですが、当日は地区内外から 100 名以上お越しいただき、ひとつの大きなイベントとして定着してきました。

打ち上げ

主催は前述の尾呂志『夢』アグリさんで、「農業だけではなく文化的なことにも取り組んで地域を元気にしたい。」とご協力をいただき、会場借り上げやチラシ配布など主体的に動いていただいています。

『夢』アグリの皆さんのおかげで、尾呂志地域は今とても活気づいており、共同の農機を導入したり、直売所に漬物加工所を増設したり、地元の歳時記を作ったりと紀州で最もホットな地域の一つに発展しています。

ただし、あくまで主役は地元の方であり、いくつかの取り組みの一つが音楽で、こちらはその応援をさせていただいている、という感覚でいます。

また、県内の別の地域でも、かつて仕事でお世話になった平均年齢 80 歳のおばあちゃんたちの朝市グループへお礼の演奏を企画したり、地元子供会のクリスマス会で演奏したりすることも企画しています。

(2)チャレンジ性

(3)協働性

音楽会そのものは比較的限られたメンバーが主体ですが、県の「地域活性化プラン」という取り組みもからみ、学校、直売所、防災など地域全体をまきこんで様々な分野の方が動いています。

(4)持続性

室内楽のメンバーも喜んで参加しており、義務感は全くなく、紀州の方たちと会えることを毎年楽しみにしています。一方の尾呂志の方たちも主体的に動いていただいています。お金がからむわけでもなく、補助事業などとも違い、お互い楽しみながら自主的な取り組みとなっていますのでこれからも続けていけると思います。また、近いうちにオーケストラのメンバーにも輪を広げ演奏会を盛り上げていきたいと考えています。

ジャーナリスト楽校 in こだいら

神山 伸一（小平市文化振興財団）[東京都]

「ジャーナリスト楽校 *in* こだいら」は、ジャーナリズムとメディアリテラシーについて考え、実践していくことにより、地域から情報発信のできる環境作りを目指し、講座などの企画を運営しています。
運営委員会は、市民、大学生、市職員などで構成され、楽しみながら活動しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

きっかけは、小平市職員の自主研究会でした。知名度の低い小平市をどうするか、小平市の未来はなどと考えている中で、情報発信についての重要性に気付き、主たる勉強のテーマに据えます。最近は、ブログやSNSなどにより、誰もが気軽に情報発信できる時代になりました。一方で、たくさんの情報をどう活用し、見極めていくか、個人の力も問われる時代です。職員だけではなく、小平市を知る人「小平人」みんなでこれらを学ぶ場として、活動を開始しました。

J楽校ロゴ_3

アピールポイント

(1)成果・効果
◆市職員の勉強会ではなく、市民とともに学ぶ開かれた場としています。講座の企画・運営も市民と市職員がともに考えています。
　→市職員、市民、学生からなる運営委員会で企画、運営
◆勉強するだけにとどまらず、実践する場として活動の領域が広がっっています。
　→地元の情報誌でコラムを連載。
　→コミュニティFMで番組を担当。
　もちろん、どちらの活動も市民、学生、市職員が一緒に行っています。

IMAG1267

(2)チャレンジ性
各界の専門家による講座はとても魅力的で、講座終了後受講生から何か実践をしたいという言葉がわき出てきたことから、実践編として活動を始め、ラジオCMづくりやロゴマークづくりなどを行いました。（ラジオCMは、総務省わがまちＣＭコンテスト2011で最優秀賞）
その後、地元のメディアに企画を持ち込み、情報紙へのコラムの連載やＦＭ局のラジオ番組の運営などに活動の場が広がっています。
単なる学ぶ場としてではなく、実践する場、ネットワーク活動として、様々な媒体の活用にチャレンジしています。

こだいらMIX

(3)協働性
市民の活動・思いに、公務員が飛び込む「公務員参加型プロジェクト」を目指しています。
市職員だけではなく、市民、学生、NPO、企業人などからなる運営委員会で、講座の企画・運営、実践プログラム（コラム連載、FM局番組づくり）の企画・運営を行っています。
活動の報告や告知は、ブログ、ツイッター、フェイスブックなどで行っていますが、この更新も手分けして担当しています。
(4)持続性
平成22年（2010年）夏に運営委員会の活動を開始、同年11月に初回の講座を行いました。
毎年、専門家を講師にお招きした４～６回の連続講座を４年連続で開催しています。（第１楽期～第４楽期）
地元情報誌のコラム連載（月１回）は、２年、FM局の番組は１年を迎えています。
活動開始から４年を過ぎようとしているが、まだまだ熱い思いが継続中です。

まちのナビゲーター増殖中！～シビックプライドがまちを変える～

大内田 佳介（北九州市 企画調整局政策部政策調整課）[福岡県]

私が設立し、代表理事を務める *NPO* 法人北九州タウンツーリズムは、「地域資源の活用と交流で北九州を元気なまちに」を合言葉に、名所・旧跡等をガイドするこれまでのガイドツアーとは違い、参加者や地域（地元）の方が交流する「体験型まち歩き」などを実施している。このような活動を全国各地へ発信するため、「第３回日本まちあるきフォーラム *in* 北九州」を開催するなど、まちの魅力発信に様々な手法で取り組んでいる。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

日本まちあるきフォーラム

私は、市役所より１年間東京の省庁へ派遣されたときに、今まで市内に住んでいて気づかなかった「本市のまちの魅力」（都心部に海や山が近接しており自然が身近に感じられる、海や山の幸が豊富である、適度な人口規模など）を感じ、このまちの魅力をもっと発信して多くの方にまちに訪れてもらいたい、また、市民の方が来訪者に「何もないまち」と言わずに「私のまちはこんなにいいところがあるんですよ」と誇りをもってもらいたいと思うようになった。

その後、帰郷し、市の都心部の公共施設は午後５時を過ぎると閉館し、商店街は午後６時を過ぎるとシャッター街になり、昼間にぎわっていた通りが一気に静まりかえることに違和感を覚え、「夜のまちの楽しみ方を提案したい」と思い、公共施設の夜間開放イベントや夜の体験型まち歩きを行う「北九州ナイトツアー」を開始した。

体験型まち歩き

現在は、市内各地の市民団体や企業（旅行会社）などと連携して、地域の文化や歴史をテーマにしたまち歩きメニューを企画し、実施する「北九州まち歩き博覧会」やまち歩きのガイド養成講座（市民向け、学生向け）を実施するなど、市民の方々のシビックプライドの向上や集客交流に取り組んでいる。

アピールポイント

(1)成果・効果

まち歩きにご協力いただいている商店街や市場の方々の「おもてなし」に対する意識の向上やシビックプライドの醸成につながっている。 また、当団体のガイド養成講座や「北九州まち歩き博覧会」に参加した団体が、自主的にツアーを開催し、地域のにぎわいづくりや住民のシビックプライドの醸成に取り組んでいる。 当団体がいち早く取り組んだ産業観光も、現在は、民間企業が主催する多くのツアー（工場夜景ツアーや工場見学ツアー等）が実施され、集客交流が進んでいる。

ナビゲーター講座

(2)チャレンジ性

名所・旧跡等をガイドするツアーとは違い、参加者や地域（地元）の方が交流し、地元の食などを体験する、「体験型まち歩き」を実施している。 また、団体設立当初から、産業観光ツアーに市内でいち早く取組み、「北九州イノベーション+ナイトツアー」を実施した。 このような活動を全国各地へ発信するため、平成２５年１０月にまち歩きの全国大会「第３回日本まちあるきフォーラム in 北九州」を開催（NPO 法人主催での開催は全国初）するなど、まち歩きによるまちの魅力発信に様々な手法で取り組んでいる。

(3)協働性

体験型まち歩きは、地元の商店街や市場の店主等にご協力いただき、参加者の方に対して、「まちの移り変わり」や「お店の歴史」を語っていただき、活動を支援していただいている。 また、「北九州まち歩き博覧会」では、市内各地の市民団体や企業（旅行会社）などと連携して、地域の文化や歴史をテーマにしたまち歩きメニューを企画し、実施した。

(4)持続性

平成 23 年に団体設立以来、「北九州ナイトツアー」に加え、市外からの転入者を対象にした「ようこそ北九州ツアー」を開始し、その後、北九州市立大学や西南女学院大学との連携（ツアー企画・ガイド養成）や「北九州エコツアー」、「サイクルツアー」等を実施している。 今年度も「路地裏さんぽ」を新たに開始する等、新たなニーズへ対応し、持続的に活動を行っている。

南こうせつさんの住む大分県杵築市を四畳半フォークの聖地に！

宮川 誠二（杵築市 農林課園芸係）[大分県]

子育ての一段落した５０歳代後半の一部の世代がギターを買い戻している動きに注目、彼らが学生時代に没頭した７０年代フォークソングを演奏する機会をプロデュースする市民団体を発足。杵築市はシンガーソングライターの南こうせつさんが住んでいる自治体でもあるため、「神田川」に代表される四畳半フォークの「聖地」とすべく、継続的にアマチュアコンサートを実施している。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

四畳半フォークの代表作でもある「神田川」を作曲した南こうせつさんが３０年以上居住する当自治体で、アマチュア音楽グループによる四畳半フォークに限定したコンサートができないか、とある市民に相談したところ、本人の実家を会場として提供されたことがきっかけ。
その後、趣旨に賛同する市民有志によりイベントを主催する団体を結成（グループ赤いてぬぐい）し、「四畳半フォークナイト@おいちゃんの聖地・きつき」を開催する運びとなった。
平成２６年3月２９日（土）に第一夜を（７組出場）、平成２７年3月２８日（土）に第二夜を（９組出場）、平成２８年４月２日（土）に第三夜（９組出場）を開催した。
第一夜の開催決定直後、会場提供者の経営する商店に南こうせつさんが来店した際にこのイベントの実施を説明、フィナーレで「神田川」を歌うことの承諾を得ることができ、後日、激励のメッセージカードも贈呈された。
また、当市の合併１０周年を記念する南こうせつさんのコンサートの実施にあたり、本人から当団体に対し前座出演の打診を受け、聴衆１，６００人の前で、団体を構成するメンバーによる演奏を披露できた（平成２７年１０月３日）。

四畳半フォークナイト第三夜
（平成２８年４月２日）

南こうせつコンサートでの前座出演
（平成２７年１０月３日）

アピールポイント

(1)成果・効果
公民館教室の参加者の多くが女性であることが示すとおり、男性同士が共通の趣味や特技で新たに手つなぎする機会を生みだすことは、比較的難しい。社会教育主事の資格を持つ私として、自身の得意分野である音楽をそのつなぎ役に活かすことを、この活動で実践できたと考えている。 また、今回のイベントを通じ、同じく青春時代をフォークソングで謳歌した世代が会場で知り合うきっかけになったことも成果の一つである。
(2)チャレンジ性
現在、かつての「中津川フォークジャンボリー」（昭和４４年－４６年）を真似たイベントが全国で開催されているが、南こうせつさんが住む自治体で四畳半フォークに特化したイベントを行うことは、他に真似できない特性である。 また、中年男性のサークル活動の構築という提案は、同じ趣味や特技の共通点を見出せば、応用できるという先例にもつながると思われる。
(3)協働性
団体の構成員の中には、例えば照明等の設営のできるホームセンターの経営者や、音響設備一式を所有する者などが居り、必要最小限の投資でイベントを実施できる体制が当初から整っている（現在構成員は7名・代表は私）。
(4)持続性
イベント出演者の固定化によるマンネリ化を防ぐため、常に「新人」を発掘し、他に開催するミニコンサート（年２回程度実施）などで「お試し披露」を勧め、フォークナイトでの出場につなげている。また、平成３０年度に国民文化祭が大分県で開催されるため、「四畳半フォークジャンボリー」というコンサートイベントを実施する予定。

職業の特性を活かしたプロボノワーカーとしての活躍

小林 圭一（武雄市）[佐賀県]

小林氏は小学校教員という職業柄必須な「教室運営」「マネジメント」のスキルを、仕事以外の場でも活かし地域貢献している。個性や経験を活かすボランティア「プロボノ」に興味を持つ個性豊かな社会人の集まりの中、チームのリーダー役として活躍。個々人の長所（個性）をみつめ、適切にまとめ、人脈をつなぎ、職業の違いを壁と感じさせない活動でボランティアを率いている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

小林氏は教員生活 20 年目の中堅となるが、仕事を離れた場所での地域活動や市民活動に積極的に参加している。H24 年度より当法人で受託実施している『プロボノ SAGA スタイル』には、様々なスキルや経験を持つ社会人有志がボランティアとして活躍しているが、氏は、未開拓のジャンルやエリアにおいても周囲をまとめあげている。

チームの中では、教員生活で培ったマネジメント能力を活かし活躍。昨年度（H24 年度）は『NPO 法人 佐賀県放課後児童クラブ連絡会』のプロボノチームにおいて、今年度（H25 年度）は『NPO 法人 SAGA アウトドアガイドクラブ』でのプロボノチームにおいて、プロジェクトマネージャーを担当している。携わったチームメンバーの職種・経歴は多様で、団体職員・教員・新聞記者・会社員など様々であるが、持ち前の洞察力とマネジメント力を発揮し、チームをリードしている。

その他、まちおこしグループ「武雄人倶楽部」として地域イベントへ積極的に参加、被災地支援グループ「ONE LOVE 武雄」としてボランティア報告会「おもやいカフェ」の開催を呼びかけるなど積極的に地域住民をまとめている。

小林さん 1

小林さん 2

小林さん 3

アピールポイント

(1)成果・効果

「プロボノ SAGA スタイル」では、プロジェクトマネージャーとして 2 年に渡りボランティアとして関わりを持った。プロボノワーカーをまとめるプロセスにおいては、関係する方々に的確なチームビルディングを行い、異業種間で多様性を受け入れ互いを尊重し合うことの大切さを示した。また、担当プロジェクトにおいても、常に相手の立場になった行動を心がけており、チームメンバーおよび支援先団体との信頼を構築している。

[波及性]プロボノに限らず、様々な地域の場において、自らの個性を活かし地域貢献する教員が求められる。「教育」は学校現場だけでは成り立たたず、児童に多様な価値観や社会の存在を知ってもらうことが大切である。小林氏のように、常に「社会」に目を向ける教員の存在は、これからの教育現場で求められる素質だと感じる。

(2)チャレンジ性

初年度プロジェクトを終えた後、「初年度よりもよりよいマネジメントに挑戦したい」と、自ら 2 年目の挑戦に手をあげた。仕事とは直接関係のない「Web プロジェクト」であるが、持ち前の勤勉さで、専門的知識を学びながら、自身の未開拓分野に挑戦している。

(3)協働性

教育の場でも「地域」との関わりが必要とされている中で、壁ができてしまいやすい「学校」という背景を持つ教員が、積極的に地域活動に携わることは、地域住民とのコミュニケーション形成においても大変喜ばしいことだと思う。学校と外とのネットワークづくりに寄与することで、今後の「学校との地域連携」においても、周囲からも必要とされる人財となることだろう。

(4)持続性

昨年から 2 年に渡り、時間を工面しながら「プロジェクトマネージャー」としてのボランティア活動を継続している。今プロジェクトは現在進行中であるが、プロジェクト終了後、そしてその後も、様々な分野、地域、市民活動において幅広く活躍されることを期待する。

地域コミュニティサポーターチームによる「ガレージ朝市」支援

井上 元昭（嬉野市 産業建設部うれしの温泉観光課）[佐賀県]

耕作放棄地や家庭菜園で栽培した農産物の販売を、元タクシー会社の跡地を利用したコミュニティセンターで、車庫の名残の大屋根の下、「ガレージ朝市」と名付けて、月に 1～2 度開催している。野菜などを作る喜び、売る喜びは高齢者に元気を与え、買い手との交流は楽しみとなっている。当該コミュニティは他地区と較べて範囲が広いので、遠隔地には送迎バスを派遣し、出品者及び購入者の利便性の向上を図っている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

嬉野市においては、平成 21 年度から小学校区を範囲とする住民組織である「地域コミュニティ」を立ち上げている。住民自らが行政と協働して、安心・安全で住よいまちを造り上げることを目的としており、市の職員は全員居住地区を中心に市職員サポーターチームを組織し、構成団体のひとつとしてコミュニティに参加している。

私はそのひとつである「轟・大野原地区地域コミュニティ」に平成 23 年の発足時から市職員サポーターとして参加している。当コミュニティは、自主防災組織活動や美化活動、その他多くの事業に活発に取り組んでいるが、そのひとつとして地域づくり部会が取り組んだ「ガレージ朝市」には、平成２７年２月第１回目の立ち上げから開催に関わってきた。活動内容としては企画立案をはじめとして、現場でのコンテナやコンパネを使った会場設営、出品者の値付けの手伝い、時には家族が栽培した野菜などの出品も行った。出品数、来場者数も徐々に拡大しつつあり、新鮮な朝取り野菜は地域の消費者に好評で、開催日には売場に並ぶのが待ちきれない状態となることもある。さらにサービス向上や活性化のために新たな仕掛けなども考えていきたい。

早朝からにぎわうタクシー車庫跡地利用のガレージ朝市

地元の新鮮な野菜の出品は、消費者にも好評の様子

アピールポイント

(1)成果・効果

高齢者が家庭菜園などを使って野菜を作ることやそれを売ることが楽しみであるという声が聞けるようになった。体を動かしたり、購入者との交流は、健康増進に繋がると思われる。また、地区内の生産者や購入者が集まるふれあいの場ができたことで、コミュニティ活動全般の活性化に結び付いた。

(2)チャレンジ性

当コミュニティは、二つの小学校区の合併地区であり、その地区は広範囲に及ぶ。標高がある上にセンターまで距離がある地区の高齢者を対象にバスによる送迎を今年度は行っている。出品者の利用も可としており、交通弱者への対策としている。

(3)協働性

地域コミュニティの各種活動には、市から地域コミュニティ交付金が交付されている。地域住民が策定した「地域計画」に記載のメニュー事業の経費に充てるが、市と十分に協議した内容となっており、市も尊重、支援することを原則としている。この朝市も交付金をベースに、必要に応じてその他補助金などを活用しながら運営している。

出品者と消費者の交流に会話も弾みます。

(4)持続性

出品者、購入者数の増加が見られるなど、地域のニーズに応えた事業となっていると感じる。この状態が続くことが持続性に結び付くが、ニーズとのずれなどの防止のためのアンケートの実施や先進地事例などを参考に常に活性化を心掛けたい。

本気の映画製作を通じたまちづくり「みしまびとプロジェクト」

小嶋 敦夫（三島市 広報広聴課）[静岡県]

従来のフィルムコミッションやご当地映画とは一線を画す「本気の映画製作」を通じて「地域の未来をつくるひとをつくる」ことを目的したプロジェクトです。多くの地域住民が参画し、約３年に及ぶ熱量溢れる活動の末、本年４月に待望の映画は完成しました。今後、全国各地で地域上映会を行うとともに、上映収益を原資に、映像という枠を飛び越え、地域のひとや団体をつなぐハード・ソフトの場づくりなど、活動の幅を広げていきます。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

映像を切り口にまちづくりを！と、地域の仲間とプロジェクトを立ち上げたのが約３年前。ドラマやアニメの誘致、ショートフィルムのコンテスト開催…、様々なアイデアが浮かんでは消えた。当市出身のお台場のテレビ局社長を突撃訪問したところ、「素人の撮った映像は内輪受けに終わることも多い。どうせならプロと組み、本気で映画をつくってみては？」とのアドバイスを受けたこともあり、映画づくりにチャレンジすることに。参加メンバーや協賛金募集、脚本作り、ロケハン、必要物品集め、ロケ弁の手配、プロスタッフとの調整の数々…。商業作品ではお金で解決することを、地域の方々のご協力を得ながら一つひとつ、クリアしていった。「映画づくりはまちづくりの手段」としながらも、作品のクオリティにも、とことんこだわった。全国ロードショーや国際映画祭のレッドカーペットを歩くことを目標に、年齢もバックグラウンドも様々なメンバーが目標に向かい一丸となった。個人としても、純粋なプライベート活動が、途中からは新設部署で市の支援担当も兼ね、市担当職員と一市民という、時に相反する立場に葛藤しながらも、面白くも辛い「面辛い」充実の日々を過ごしている。

夏のロケ集合写真。私は
トラブル対応中で間に合わず（泣）

地元町内会の協力を受け
お囃子「しゃぎり」シーンの撮影

アピールポイント

(1)成果・効果

10 人にも満たない仲間と始めた活動が、NPO 法人を中心に、運営メンバー約 200 名、後援 58 団体、協賛 272 社・団体、個人寄付約 200 名（ほか少額寄付・募金多数）、延参加者 約１万名と大きなうねりに発展。多くの市民が世代を超えつながり、同じ目標に向け活動することを通じて、シビックプライドが醸成され、まちづくりの機運も高まった。映画は、４つの国際映画祭に正式招待され、全国ロードショーも決定するなど、シティプロモーションにもつながっている。

(2)チャレンジ性

制作のコアな部分は一流のプロに委ね、それを多くの市民がサポートするスタイルで、本格的な長編映画を制作した。また、脚本、企画ありきの商業映画と異なり、多くの市民の参画により、地域資源を掘り起こし、テーマ、脚本をゼロから練り上げたことで、いわゆるご当地映画とは一味違う、家族がテーマの物語性の高い作品となった。こうして完成した作品のクオリティと画期的な製作プロセスにより広く共感を得る仕組みの先進性、独自性は高い。

(3)協働性

民間主導のプロジェクトを行政が積極的に後押しし、補助支援のみならず公共施設でのロケ協力、関係機関との調整など官民共創により事業推進を図った。参加者は高校生からリタイア世代まで幅広く、学生、主婦、サラリーマン、経営者、公務員と多様なバックグラウンドを持ち、「大人の部活動」ともいえる画期的な交流の場となっている。また、市民はもとより近隣市町の住民も多数参画し、ロケの一部を周辺地域で行うなど、広域的な展開も進んでいる。

(4)持続性

国際映画祭出品、劇場公開の後は、千か所を目標に全国のまちづくりの担い手による自主上映会により映画とその制作プロセスを発信するとともに、上映収益を今後のまちづくり活動に活かしていく予定。活動主体の NPO には、企業のマネジメント経験が豊富なメンバー等、多様な人財が集結し自立した組織運営がなされており、活動の持続性が担保されている。

完成した映画「惑う After the Rain」
ポスター

環境教育で人づくり「そそのかし屋は今日も人と人をつなぐ」

大西 知芳（林野庁 京都大阪森林管理事務所）[京都府]

職務とボランティア活動の両面で実施してきた森林環境教育活動に広がりを持たせるため、京都府南部の環境教育団体等が集まって環境教育のネットワーク団体を平成２４年に設立。順調に事業を展開するも事業実施が目的化したため、人のやる気を奮い立たせ、背中を押す「そそのかし屋」にシフトチェンジ。「思いを形にする」ために必要な人と人とをつなぎ、時には一緒に参画して「人・自然・地域を愛する人づくり」を目指しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

職務を通じて実施してきた森林環境教育活動を自身の地元に広げるため、京都森林インストラクター会に所属して活動を開始。森林と人とをつなぐ技術の向上を図るために環境教育の手法を学び始めたところから環境教育全般の分野に活動範囲を拡大。自身のスキルアップのために参加した研修で京都府南部における環境教育活動の問題点を有志と議論し、環境問題を解決するためには人づくりが大切と共有、基本コンセプトを「人・自然・地域を愛する人づくり」として平成 24 年 6 月に京都やましろ環境教育ネットワークを設立。会長や事務局長を歴任する中、人材育成事業や出張教室，ネットワーク交流事業（やま環カフェ）を開催し、平成 26 年度には京都府立木津川運動公園での環境教育事業を受託するまでに至ったが、事業実施に奔走し、本来の目的を見失いがちになったため、事業は構成団体に任せ、ネットワークの強みを活かして人と人をつなぐことへシフトチェンジ。以来、熱意のある人を「そそのかし」、「思いを形にする」お手伝いとして人と人をつなぎ、時にプロジェクトに参画しながら「人・自然・地域を愛する人づくり」の実現を目指している。

実行委員として参画した
第 10 回京都･環境教育ミーティング

木津川運動公園での
環境教育活動

アピールポイント

(1)成果・効果

ネットワーク交流のノウハウの蓄積により人と人をつなぐ仕掛けが様々な方法で可能となった。その結果、地元若手農業者を自然農の輪でつないだり、市役所の環境担当者と環境活動家をつなぐ交流カフェを開催して協働事業の足掛かりに、マンネリ化した環境教育ミーティングに人材を送り込んで立て直しを図る、行政とＮＰＯをつなぐことに腐心している人と協働して日本最大の環境教育ミーティングでワークショップを開催するなど思いを形にして人を育てることが実現しつつある。このノウハウを生かして、公務でも行政と企業をつなぐえんたくんミーティングを開催し、鹿害を防ぐ樹木の保護についてアイデアを出し合って製品を開発中である。

えんたくんを使ったきづがわ交流カフェ

(2)チャレンジ性

ネットワーク団体としてのコンセプトを維持しつつ、その役割について議論と試行錯誤を繰り返し、熱意のある人を応援する意味で「そそのかし」、相乗効果を期待して人と人をつないでいる。また、つないで終了ではなく、自ら参画してプロジェクトを遂行することも行っており、なら環境教育ミーティングの企画と清里ミーティングでの行政とＮＰＯをつなぐワークショップ開催が進行中である。

(3)協働性

京都やましろ環境教育ネットワークは構成団体の中から１０名を募って運営委員会を開催しており、運営自体が協働の賜物であるほか、人と人をつないだ協働の例として「きづがわ交流カフェ」では木津川市役所と京都府地球温暖化防止活動推進センターとの協働開催、なら環境教育ミーティングは NPO 法人環境ネットワークなら、清里ミーティングは自然倶楽部 I(アイ)との協働事業となっている。

(4)持続性

京都やましろ環境教育ネットワークは任意団体であるが、会則を定め、年度毎の経理決算を行うなど組織として継続的なものとなるように整えるとともに、定期的に運営委員会を開催し、組織の方向性とプロジェクトの進捗等を確認している。また、全てのプロジェクトは事後評価を行い、質の維持に努めている。

いつでも・どこでも元気創造活動

有澤 聡明（須崎市 元気創造課）[高知県]

業務のみならずプライベートにおいても、地域の元気創造につながる様々な取り組みに自ら参画し、企画・立案段階から奔走するとともに、事業の鍵となる「人」と「人」を有機的に結び付ける先導的役割を担っている。また、移住・地域づくりのＮＰＯ法人や市が主催する人材育成塾の塾生・修了生をはじめ、各地の自治会や市街地の商店街・町内会などに対して、積極的な対話と行動により、元気創造の更なる広がりに取り組んでいる。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

様々な活動における一例としては、
「現代地方譚」の実施主体「すさき芸術のまちづくり実行委員会」に参加。
若手アーティストが須崎に滞在し、須崎を様々な形で切り取った作品を制作・展示する「現代地方譚」。地域住民にとっては、新たな芸術・文化に触れる貴重な機会であると同時に、遠くは都市圏から招聘された若手アーティストとの地域交流は多くの刺激と元気をもたらしてくれる。これまで３回は行政主体の事業であったが、本年度から地域の住民や各種団体で組織する実行委員会の主催に移行。地域が自らの創意工夫と柔軟性、機能性を発揮することで、地域全体への広がりと地域の主体性を促進するために非常によい機会・試みであり、自身も同地域の住民として一緒に参画するに至る。
「すさきまちかどゼミナール」の実施主体「すさきまちかどゼミナール実行委員会」に参画。
市が主催する人材育成塾の修了生で組織する「すさき未来塾同創会」が30名以上の講師を招き２日間で集中的に様々な分野の講座を展開し「知的財産を育む」ゼミナールを実行委員会を組織し開催することを企画立案。自身、「すさき未来塾同創会」メンバーであることから、計画段階から参画。

「ブログ勉強会」

「人材育成塾ち合わせ」

アピールポイント

(1)成果・効果
自身の職員としての資質向上は言うまでもなく、様々な取り組みが行政主導でなく、それぞれの実施主体の自主性による元気創造の取り組みにより、地域資源の再発見や可能性を追求する機運が醸成されることで持続可能なまちづくりに向けて好循環が生まれつつある。
(2)チャレンジ性
豊かな人間関係を育みながら参画する元気創造の取り組みに留まらず、地域の防災・安全に対する意識も高く、地元消防団への加入や自主防災組織における活動など、どのようなことにも自ら飛び込んでいく姿勢はまさにチャレンジ性に優れていると言える。
(3)協働性
「すさきまちかどゼミナール」を企画した「すさき未来塾同創会」メンバーは自営業者、会社員、高等学校教諭、ＮＰＯ法人スタッフ、公務員などとなっており、企画立案におけるノウハウは多種多彩であると同時に、須崎の元気創造をめざすベクトルが一致していることから協働性は高い。
(4)持続性
特別な工夫ではなく、地域住民として自身が常に関わり続けることへのモチベーションは非常に高いと思われるので、今後も実行委員会のレベルアップを図りつつ、事業実施に要するノウハウを蓄積し継続していくことが見込まれる。

「コミュニケーション」

障がい者スポーツ指導員としての活動

北村 淳子（長野県 健康福祉部長野保健福祉事務所福祉課）

平成 *18* 年に障がい者スポーツ指導員の資格を取得し、障がい者スポーツの支援活動を行っている。平成 *25* 年から、毎年、全国障がい者スポーツ大会に長野県チームのスタッフとして参加。本年度から、長野県障がい者スポーツ指導者北信地区協議会事務局長として、各種スポーツ大会への指導員派遣などの取りまとめを行っており、*11* 月に、障がい者スポーツ体験教室（（公財）日本障がい者スポーツ協会公募事業）を開催予定。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

平成９年に長野県障害福祉課に配属され、身体障害者手帳の発行など、障害者福祉に関する業務を担当した。その後、現地機関の福祉課に配属になり、地区の障がい者スポーツ大会を担当したのがきっかけで、平成 18 年に初級障がい者スポーツ指導員の資格を取得後、余暇に各種スポーツ大会のボランティアとして参加するようになった。平成 25 年からは、全国障がい者スポーツ大会に毎年サポートスタッフとして参加しており、本年度も岩手大会に参加予定である。平成 25 年に、指導員として専門性を深めるため、視覚障害者卓球の初級審判員資格を取得し活動する中で、視覚障害について理解を深めたくなり、平成 26 年に長野県盲ろう者通訳介助員の資格も取得した。また、障害福祉課に配属されたときから続けていた手話の勉強を、各種大会等で聴覚障害者と会話するため深めたくなり、昨年度は、長野県須坂市の手話奉仕員講座を受講した。平成 27 年度には中級障がい者スポーツ指導員として登録され、この４月から、長野県障がい者スポーツ指導者北信地区協議会事務局長として、120 人の会員の取りまとめをしており、現在、11 月のスポーツ体験教室に向け、奔走している。

アピールポイント

(1)成果・効果

平成 26 年度から、再び福祉課に配属になったが、地区のスポーツ大会に協議会事務局長として指導員の参加を募ったり、障がい者スポーツに対する知識を生かし助言することができた。また、窓口に来る聴覚障害者を手話で案内したり、ボランティア先で福祉課で申請する事務の手続方法について相談され、担当につなげたり、福祉課職員としての職務でも貢献している。また、長野県の障がい者スポーツを担う、長野県障がい者支援課、長野県障がい者福祉センター、（一財）長野県障がい者スポーツ協会並びに長野県聴覚障害者協会及び長野県視覚障害者協会等の団体に人脈があるため、お互いの連携を深める役目も担っている。また、この４月からは長野県障がい者スポーツ指導者北信地区協議会事務局長として、各種障がい者スポーツ大会等への指導員の派遣調整等行うとともに、（公財）日本障がい者スポーツ協会公募事業を開催予定であり、また、視覚障害者卓球審判員として、11 月に長野県で開催される北信越大会に参加するなど、障がい者のスポーツ振興に寄与している。

(2)チャレンジ性

障がい者スポーツ指導員として活動していくなかで、障害に対する知識を深めたくなり、視覚障害者卓球審判員、盲ろう者通訳介助員及び手話奉仕員の資格を取得するなどして、障害に関する幅広い分野に詳しくなった。

(3)協働性

(1)で挙げたように県の機関等に人脈があるうえ、盲ろう者又は視覚障害者の団体で、通訳介助のボランティアも行っている。また、スポーツ大会やボランティアで知り合った障害者と職場や別の大会で再会することもあり、ネットワークを広げている。特に、11 月に開催する体験教室では、総合型スポーツクラブ連絡協議会、スポーツドクター協議会及びレクリエーション協会とも協働している。

(4)持続性

資格を生かし、活動を続けていく。来年度以降も、全国障がい者スポーツ大会に参加したい。なんらかの形で、東京パラリンピックにも参加したい。

雅な音色とともに～150 年の地域文化の保存継承活動

藤田 辰昭、田中 佐和子、岸 昌宏、樋詰 修己（高岡市）[富山県]

高岡市福岡町地域の雅楽・舞楽は、高岡市無形文化財の指定を受け現在まで *150* 年以上にわたり保存継承されている。（保持団体名：洋遊会）同会は正統な雅楽の継承に努め、また、その普及として、地域での演奏会や「雅楽の館（雅楽資料館）」での展示活動などを行っている。
四名は、同会の会員として、横笛、篳篥、笙などの雅楽器演奏と舞楽の修得に尽力し、団体運営実務に携わり、地域伝統文化の継承活動を行っている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

神宮式年遷宮での舞楽

昭和 60 年代に会員減少で伝統の継承が危ぶまれ「Ｙ夫妻（いずれも公務員）」が後継者となるべく挙手、この分野での「飛び公」の先導となった。次いで、平成元年に藤田が加わった。文化行政推進策もあり、特に平成 8 年富山県で国民文化祭があり、福岡町（当時）が邦楽の祭典（雅楽）主催会場となった際にその実務面に携わった。これを契機に、平成 10 年から田中が加わり、舞楽の習得に続き雅楽器の演奏を学んでいる。また、平成 23 年には、岸、樋詰が加わり、雅楽器の演奏と舞楽の習得に努めている。
日本に千数百年前から受け継がれている雅楽であり、他の会員とともに楽しみながらも、その正統な形での保存継承に努力している。会としては、定期演奏会、地域イベントや学校等での演奏があり、これらを通じて雅楽の普及啓発を行っている。海外においても、英国（H12、H19）、ハワイ（H24）等で公演を行っている。また、平成 25 年の伊勢神宮式年遷宮では、全国諸芸能奉納のトップバッターを努めた。平成 22 年度から、市教育委員会と連携した「ジュニア雅楽講座」を開催し、小学生を中心とした後継者育成に取り組んでおり、この指導にも携わっている。

雅楽の館での演奏

アピールポイント

(1)成果・効果
会としては、複数回の海外公演を行うなど、活動の範囲を国外にまで広げるに至った。また近年は、自主公演だけでなく、様々な公演の依頼を受けることが多くなっている。これらを通じて、会員の技術の向上に繋がっている。 昭和 60 年代には存続が危機にあったにも関わらず、今日ここまでに至ったことに関し、それぞれが会員として伝統文化の保存に尽力してきたと考えている。
(2)チャレンジ性
伝統文化保存継承ということから、当初は、会として伝統ある舞楽演目「万歳楽」「春庭花」の修得からのスタートであった。その後、一時途絶えた舞楽演目「蘭陵王」「納曽利」の復活、新たな演目である「陪臚」「五常楽」などへもチャレンジし、修得を進め、会としての舞楽演目として定着している。 いずれもこれらの舞楽の習得に自らチャレンジし、自己研鑽に励んでいる。

さくらまつりでの舞楽

(3)協働性
高岡市福岡町地域の中心部にある「雅楽の館」での企画展示や演奏会の開催など、同施設の指定管理者と協働しながら実施している。また、毎年 9 月 23 日・24 日に同地域で開催される「つくりもんまつり」、４月のさくらまつりなどで、市、商工会、観光協会等と連絡調整を行いながら公演を行っており、雅楽の普及と併せて地域の魅力向上・魅力発信に向けた活動を行っている。
(4)持続性
雅楽は年齢を問わず携わることができるものであって、洋遊会においても、会員は上は 80 歳代の方から、下は小学生までと幅広い年齢層の会員によって活動は継続し、伝統文化の継承がなされている。この点で将来に向けて継承されるものといえる。また、高岡市のみならず、石川県から参加している会員もおり、地域的な広がりもあって、それぞれ多様な刺激を受けながら活動を行っている。
「飛び公」としても、この四名は、管理職、中堅、主事と幅があり、さらに、既に退職した「Ｙ夫妻」を含め、伝統的なものとして定着を見ている。

吾桑地域の青年団 BOKKENT（ぼっけん）での地域おこし

高橋 隼人（須崎市 企画政策課企画政策係）[高知県]

高知県須崎市吾桑（こうちけんすさきしあそう）地域の青年団的な活動をしている団体の *BOKKENT*（ぼっけん）に所属。吾桑地域を元気にすべく、須崎市内でのイベントの手伝いや出店販売を行っている。

吾桑地域にそびえ立つ桑田山に2月下旬から3月中旬頃にかけて咲く、雪割り桜を用いた夜桜キャンドルナイトを、*BOKKENT* 主催で毎年行っている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

平成24年、須崎市役所の臨時職員として在職中に、吾桑地域を中心に活動していた地域おこし協力隊員が、吾桑の若者を集めて地域おこしをもくろんでいた。当時、私の母が吾桑公民館で働いていたこともあり、母の紹介から声がかかり、おもしろそうだなという思いから参加した。

平成24年秋に BOKKENT（ぼっけん）結成。結成当時のメンバーは8人だった。

結成後は、吾桑地域を中心にイベントの手伝いや出店を行っている。BOKKENT 主催のイベント、夜桜キャンドルナイトは平成28年2月27日の開催で第4回目を迎えた。毎年、イベントで使用している竹灯篭用の竹を取るのに苦労している。去年はしなっていた竹を押さえながら切ったところ、切った反動で竹が跳ねて股間を打ち悶絶した。命がけでイベント準備に取り組んでいる（笑）。

現在メンバーは入れ替わりなどもあり、実働部隊は8人程度。しかし、BOKKENT の知名度は年々増し、課題は多いが、吾桑地域の方々に助けてもらいながら活動している。

竹加工

アピールポイント

(1)成果・効果

1年目は吾桑地域限定で試験的に行った夜桜キャンドルナイト。2年目以降来場者が増え、今では吾桑地域の人口の半分近くの千人が来場するイベントに成長した。毎年新しい竹灯篭の作成や、地元学校への作品制作依頼、SNS サイト等を活用した周知による効果である。

(2)チャレンジ性

主催のキャンドルナイトでは、毎年違ったアイデアでキャンドルを灯すようにテーマを変えて、作品制作をしている。 須崎市内での七夕イベントやクリスマスのイルミネーションイベントなどへの参加依頼を受け、テーマに合った作品配置をするなど、積極的に他団体主催のイベントへも参加している。

(3)協働性

各イベントへの参加やキャンドルナイトイベントの準備など、BOKKENT メンバーの負担になりすぎないように、役割分担を行い活動している。 市内イベントへスタッフとして積極的に参加し協力している。吾桑地域の人達と協力してキャンドルナイトを開催している。

(4)持続性

4年連続夜桜キャンドルナイトを開催。吾桑地区で毎年開催されている駅伝大会などにも毎年参加している。 BOKKENT の知名度も毎年上がり、U ターンで須崎市に帰ってきた若者にも声をかけ手伝ってもらっている。若者から老人までが一体となって地域を盛り上げられる手助けをする団体を目指して活動していきたい。

ライトアップ夜桜

竹灯篭

空き店舗を活用した地域活性化プロジェクト～EGAO 家～

野村 和義、和田 真人（豊明市）[愛知県]

地域活性化を目的に、市職員が発起人となってシャッター商店街の空き店舗を借りる。「末広がり・無限の可能性」を合言葉に、地元行政区、商店街、大学、*NPO* 等を巻き込み *2015* 年秋に活動がスタート。関係者が協力して運営費を出し合い、地域を元気にし、笑顔を創出する場として、「*EGAO* 家（えがおや）」と名付け、様々な活動を実施。参加者は、半年間で *0* 歳から *90* 代まで延べ *1,100* 人を超えている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

「運命を感じた 8,888 円」

消防団や JC、伝統芸能祭りなど、別々な所で地域活動をしていた二人が、人事異動により偶然同じ部署に。すぐに意気投合し、一緒に活動をスタート。最初は、「学びの会」という勉強会を立ち上げ、英会話やワインなどの講座を開催し、市内外の自治体職員や様々な業種の人と交流する場をつくり、人の輪を広げた。

その中で、地元商店街の金物屋さんと繋がり、私たちのまちでもシャッター商店街が増えていることについて語り、危機感を感じる。その時の飲食代が 8,888 円だったことから、「末広がりに無限！これはやらねば！」と運命的なものを感じ、商店街活性化の取組みを決意。

実際に空き店舗を借り、市職員が地域に飛び出し、思いついたことを何でもやってみる場、そして地域を元気にし、笑顔を創出する場として、この場所を「EGAO 家」と名づけ、2015 年秋から活動がスタート。

地域を巻き込むために有志を集めて運営協議会を設立。行政区や商店街などが一致団結し、地域活性に向けた様々な取組を実施している。

【空き店舗お掃除イベント】
大学生や地域の人と一緒に

【３者協定】行政区･商店街･
大型スーパーが連携

アピールポイント

(1)成果・効果

５年間空き店舗だった場所を拠点として整備。内装には、老朽化により解体された野外教育センターの廃材を利用。小中学生が 30 年以上前から宿泊してきた友好都市での思い出を残せるよう、看板や机が飾られている。また、地域連携では、近隣の大型スーパーと商店街が WIN-WIN の関係を築けるよう、行政区を加えた３者間で「連携協力に関する包括協定」を締結。情報発信やイベント開催などで連携。賑わいが生まれたことで隣の空き店舗に接骨院が入居し、空き店舗削減の一助に。４月～９月の半年間で、０歳から 90 代まで延べ 1,100 人以上が EGAO 家を訪れている。

(2)チャレンジ性

１分でも長くシャッターを開けることを目標に、空き店舗の利用を平日午前、平日午後、夜間休日の３部制とした。平日午前は、地域の人が気軽に集まり、コーヒーを楽しむサロンとして週５日活動。平日午後は、商店主が講師となりプロならではの知識や情報を提供する匠講座を実施。眼鏡店による補聴器体験や、金物店による包丁の研ぎ方講座などを開催。夜間休日は、何でもやってみる場として、市職員の自主勉強会、ダンボールでピザ作り、子どもの五感を育てる遊び、24 時間イベントを実施。普段、商店街に足を運ばない人も多く訪れた。

【子どもの五感を育てる遊び】
片栗粉を溶かして感触を楽しむ

(3)協働性

市職員だけでなく、商店主、NPO 団体などが主要メンバーに加わり、行政区、商店街、老人会、大学等の参画を得て「EGAO 家運営協議会」を設立。地域一丸となって活動を支える体制ができた。また、藤田保健衛生大学の「アセンブリ教育」として連携。将来医療の専門職が社会貢献に必要なスキルを身につける場として、学生が空き店舗で活動すると単位取得できる仕組みもできた。

(4)持続性

利用者が増えたことで、自主的なサークル活動や運動教室が始まり、主要メンバーの負担なく活動している。また、運営協議会メンバーで必要な経費を出し合うことで、地域で支える持続可能な運営スタイルができた。

東京と地元茨城をつなぐ「ツナグ茨城（若手茨城人交流会）」

助川 達也（茨城県 保健福祉部障害福祉課）

同郷の人とつながりを持ち，故郷のために何かできないか，そんな思いをカタチにする場「ツナグ茨城（若手茨城人交流会）」は，地元を離れた若手の茨城出身者，茨城ゆかりの方が集まる会です。
Facebook グループによる情報交換をはじめ，定期的な勉強会や懇親会を開催。東京・首都圏と茨城・地元市町村をツナグ活動が生まれ育つ場所として，約 *400* 名が茨城愛をもって「地元のためにできること」を考えています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

東京出向時，同郷の者がなかなかおらず，集まるすべも特になかったことから，平成 22 年 4 月に，若手が集う「県人会」の設立を宣言。その後，個人として地域に飛び出し，各種勉強会等に参加して，多数の若手茨城出身者と出会い，平成 23 年 12 月に第 1 回の交流会を開催した。その後，「食と農と女性」や「まちづくり・地域活性化」などをテーマとした勉強会や交流会を 12 回開催。Facebook での情報交換の場には，公務員だけでなく，サラリーマンや独立士業の方，一般の主婦等，茨城出身者・ゆかりの方が 380 名を超えている。
平成 28 年 9 月に，茨城出身者等が集まり，地元のためになにができるかを考える場として，「出身地 Day 茨城～ツナグ茨城わがまちサミット」を開催。茨城県内 44 市町村のうち，29 の市町村から出身者等約 100 名が東京に集結した。東京の真ん中で茨城弁が飛び交う中，笠間と三鷹をツナグ活動や，茨城の出身女性をツナグ活動などを紹介し，「東京にいても地元のためにできること」のキックオフの場となった。
この活動を通して，地元をめぐるツアーの実施や，二地域居住を行う方も出てきている。

ツナグ茨城交流会風景
（27 年 1 月開催時）

アピールポイント

(1)成果・効果
「茨城」（同郷）というだけで，メンバーはすぐに打ち解け，盛り上がる。地元の思い出話や離れたからわかることなど，色々な気づきを共有することで，地元茨城の魅力再発見にもつながった。そして，熱意ある人と人とが出会う場を設けると，思ってもいない動きが生まれた。例えば，今まで茨城に興味のなかった方が茨城に足を運ぶことになったり，茨城の活動が各種媒体で多数紹介されたりした。地元をめぐるツアーの実施や二地域居住に取り組む方も出てきている。今後とも，出身者のみならず，茨城に興味がある，行ってみたいという人たちの「関係人口」を増やしていきたい。

28 年 9 月 10 日開催「出身地Ｄａｙ茨城～わがまちサミット」

(2)チャレンジ性
東京出向直後は，自分のまわりに茨城出身者はほとんどおらず，交流するすべも特になかった。そこで，地域に飛び出し，公私を越えた様々な場に顔を出すことで，仕事だけでは出会えない，熱い想いをもった茨城出身者に数多く出会うことができた。 何もなかったところから，出会い，つながり，かたちづくる，まさにチャンレンジそのものである。
(3)協働性
ツナグ茨城のスタッフは公務員は少なく，一般のサラリーマンや主婦，独立士業の方が，「地元への思い」のもとに活動してくれている。ここには，役所・民間という関係は全くなく，「茨城」をキーワードに，みんながそれぞれできることを行うという，協働を超えた関係性が築かれている。
(4)持続性
任意のグループであるため，「できる人ができることを」というスタンスで継続している。また，最近では 20 代の出身者が積極的に参画してくれており，今後の展開も期待できる。これからも，茨城への愛とある程度のゆるさを大切に，「地元のためになにができるか」思いをカタチにする場を，みんなで楽しみながら作っていきたい。

わがまちサミットチラシ
（出身地分布図）

松山のまちづくりの担い手育成を目指して

田所 佳奈（松山市教育委員会事務局 地域学習振興課小野公民館）[愛媛県]

平成 *26* 年 *11* 月末に開講した、松山市のまちづくりの担い手育成講座「アーバンデザインスクール松山（以下、スクール）」（松山アーバンデザインセンター主催）に参加しています。大学生から社会人まで幅広い世代が隔週で集まり、松山市内のまちづくりの課題や楽しみ方について各自が発見をし、テーマを導き、大学関係者や行政、地元関係者と連携しながら、座学にとどまらず、実践的なまちづくり活動に取り組んでいます。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

当時担当業務であった公共施設建設のワークショップ等を通して、市民目線のまちづくりの重要性を日々感じていたところ、平成 26 年 11 月、松山アーバンデザインセンター開設に伴いスクール開講の話を聞き、参加を決めました。
スクールは１年間を１期として現在２期中です。
私のグループでは１期は、松山の重要な観光資源である道後温泉本館の改修工事による道後のにぎわいの影響に問題意識をもち、「さがせっ！道後の魅力プロジェクト」をテーマに、本館に依存しない新たな魅力を発掘し、観光客へ発信することで道後のまちを楽しんでいただくことを目指しました。具体的には、市民を対象にまちあるきイベントを開催し、道後の魅力を参加者自身で発見していただき、集めた魅力をマップ化しました。
２期は、「椿のおもてなし」をテーマに、松山市の市花「椿」と香りがもつ記憶を呼び覚ます効果に着目し、椿の香りのブランド化を目指して活動しています。具体的には、椿の香りを用いた自主製作商品（リードディフューザーやバスソルト、アロマキャンドル等）の販売や、椿油によるリラクゼーション、松山空港等にて香りの空間演出を行いました。

スクール開催時の打ち合わせの様子

アピールポイント

(1)成果・効果
１期も２期も多くの地元メディアに取り上げていただき、たくさんの地域の方々に注目していただいています。 １期では、道後のいたるところにある湯玉をシンボルとしてまちあるきイベントを行い、住民たちが思う道後の魅力を集めました。ガイドブックにはない、地元ならではの楽しみ方を「道後　ゆだまっぷ」としてまとめ、2000 部発刊し、観光案内所や旅館等にて配布しています。 ２期では、椿の香りの自主製作商品に注目したいくつかの企業や銀行から商品化の提案がありました。椿が市花である松山市役所も私達の活動に注目し、今後椿に関連する事業との連携に向け、検討を進めています。 そして、それらスクールの活動で得た松山の歴史に関する知識や出会った方々が公民館主事の講座企画等の仕事で役立っています。

道後まちあるきイベント
「歩いてみつける道後の魅力」の様子

(2)チャレンジ性
スクール生で考えたまちづくり企画を実践するためには地元の方々の理解が必要です。道後を拠点とした私たちの活動は、道後温泉旅館協同組合や道後温泉誇れるまちづくり推進協議会、道後温泉事務所等に提案や相談に通ったことで、地元の祭りに呼んでいただいたり、助言や協力をいただいたことで、より質の高い活動ができました。

椿の香り手作り商品
（リードディフューザー、キャンドル等）

(3)協働性
スクールは約 30 名の参加者が７グループ程に分かれて活動しています。様々な背景を持つスクール生がいるため、平日の昼間にある外部との打ち合わせには学生が参加できたり、美術系の学生はデザイン面で強みを発揮します。また社会人のスクール生には、香りの専門家との人脈があったり、市の内部と調整したりと、個々でできることを持ち寄って、互いに補い刺激し合いながらまちづくり活動を進めています。
(4)持続性
スクール生は、１期終わるごとにブロンズ、シルバーとランクアップする仕組みをとっているので、多くの１期生が継続して２期も活動を行っています。また、スクール生の活動が浸透してきたので、新たなスクール希望者も出てきており、継続的な活動につながっています。

本でつながる、まちから全国へ！

明石 友貴（生駒市 市民部収税課） [奈良県]

生駒ビブリオ倶楽部は生駒市図書館と共催で定期的にビブリオバトル(本を紹介する書評ゲーム)を開催しています。当初は図書館を会場に毎月の定例開催だけでしたが、他団体との交流戦、関西大会の開催、教員へのビブリオバトル講習、学校でのビブリオバトルの演示、日本初のビブリオバトル全国大会開催を行うなど、次第に活動の幅をひろげています。いまや地域だけでなく、本を通した全国的なコミュニティを作り上げています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

平成 24 年 12 月に月例の第 1 回となるビブリオバトル in いこまが開催され、しばらくは図書館の単独で開催されていましたが、その面白さにハマった人たちが半年後となる翌 25 年 6 月に有志で生駒ビブリオ倶楽部を発足しました。
メンバーは、主婦・公務員・サラーリマンをはじめ多彩な顔ぶれとなっています。
倶楽部員と図書館が対等な関係で意見交換しながら協働で進めていくことで、通常の図書館ではなかなか実現しえないことに取り組んできました。
はじめは単に楽しみのための参加でしたが、活動が進み本を通したコミュニティやネットワークが拡がるごとにその楽しさも拡大しています。
近年の本を通じたコミュニティづくりのムーブメントの中でも、際立った存在として、市の提唱する「本のまちいこま」の推進にも寄与しています。

生駒ビブリオ倶楽部のメンバー

アピールポイント

(1)成果・効果
市民団体である生駒ビブリオ倶楽部と生駒市図書館の地域に根ざした活動と、それを超えた全国的な活動はたびたびメディアにも取り上げられてきました。特に日本初となるビブリオバトル全国大会 in いこまは高い評価を受け、Bibliobattle of the Yeare2016 優秀賞を受賞しました。
(2)チャレンジ性
月例の開催を続けるとともに他団体との交流などを繰り返す中で着実にノウハウを蓄積、初開催から 1 年後にはビブリオバトル関西大会を開催。翌年に第 2 回関西大会を開催し、その半年後にはビブリオバトル全国大会を開催しました。その結果、ビブリオバトルと言えば生駒市と言われる存在になりつつあります。
(3)協働性
すべての活動は倶楽部員と市が協働で行っています。当日の運営だけでなく、マスコットキャラクター「ほんのむしくん」やキャッチーなポスター、HP は高い評価を得ています。 また、全国大会の際には地元の商店とコラボしお土産販売を行ったり、本のテーマ「カレー」の回では業界団体の後援を得てカレーを賞品とするなど、その幅を拡げています。
(4)持続性
定例開催は 40 回を数え、番外編や交流戦を含めると 50 回近く続いて言います。一方で、ビブリオバトルだけに留まらない様々な結果が生まれています。 倶楽部員によるトークイベントや、絵の展覧会の開催、地元書店員を囲む新たなサークル活動等、まだまだ活動は広がり続けています。

ビブリオバトル全国大会 in いこまの様子

生駒ビブリオ倶楽部公式キャラクター
ほんのむしくん

市マスコットキャラによるまちづくり『チームヴィーブルくん』

チームヴィーブルくん (合志市 政策部企画課(チームヴィーブルくん BOSS 所属課)) [熊本県]

ゆるキャラブームにゆるやかに乗り、合志市総合センターヴィーブルのマスコットキャラクター"ヴィーブルくん"を筆頭に、市職員有志で平成 *25* 年度に結成した『チームヴィーブルくん』*18* 人（平成 *28* 年 *9* 月 *30* 日現在）がボランティアでのんびりと活動している。"ヴィーブルくん"が市や地域のイベントに参加して遊び倒した様子を「ヴィーブルくん活動報告」として市公式 *HP* に記事を掲載、市 *PR* の一翼を担っている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

H26.1.11 第 8 回合志市民健康カントリーマラソン大会出場

平成 25 年 8 月、ロアッソ熊本のゆるキャライベントをきっかけに、施設に眠っていた着ぐるみを引っ張り出し、参加したのが始まりである。その際にノリで面白おかしく写真をふんだんに使った記事を市 HP に掲載。その後、ロアッソ熊本との協働の名目でサッカー観戦・応援を続ける。平成 25 年 12 月には、その活動が認められ、マンガ・アニメの祭典「くまフェス 2013」に招待され、成り行きでニコニコ動画にもいきなり出演。HP に活動報告として掲載。あくまでも仕事っぽく遊び続ける。
平成 26 年 1 月、市主催のマラソン大会実施の際、広報担当から表紙の写真（案）用に参加者と一緒にヴィーブルくんがスタートする絵がほしいと言われて、心身共に何の準備もせずに参加。なぜか市長監視の下 1,500m 完走する羽目となる。市公式 HP で思いの丈を綴る。事業担当（個人）レベルの活動を続ける。
平成 25 年度末、政策課職員のかけ声でヴィーブルくんを活用した市 PR 任務を遂行するため、正式に『チームヴィーブルくん』を結成。13 人の有志が集まり活動が本格的に始まった。
平成 26 年 3 月には有志制作によるテーマソングが完成。市民イベントで披露されている。

H26.5.11 草枕の駅コンサートの応援

アピールポイント

(1)成果・効果
「ゆるさ」をモットーに、一人ひとりが自分の得意分野を活かし、各自の能力や持ち味を十分に発揮している。市職員有志のメンバーが「ゆるキャラ」というキーワードで独自のつながりを構築し、活動。 市の公認キャラではないが、年平均 10 回以上の活動は、市の PR にもなり市長始め幹部職員も暗黙ながら応援･･･どころか、市主催イベント開催時には出演依頼がかかる状況になる。平成 27 年 3 月、県外に進出し、福岡県柳川市のイベントにも参加。 地道な活動を続け、会場では「ヴィーブルくん」と名前で声をかけられるようになるほど、今では、本市のイベントには欠かせない存在として認知度もゆるやかに上昇した気配を感じている。

H27.10.25 第 9 回くまもとサッカーフェスタに参加

(2)チャレンジ性
会場を盛り上げるため、事前にイベントの情報の共有を図っているが、現地でのアドリブ力がモノを言う活動である。 基本的にヴィーブルくん、付人、カメラマンの 3 人以上での活動だが、ヴィーブルくんは日によって、ダンスが得意だったり、サッカー選手の物まねをしたり、やたら若い女性に絡んだり、と会場の雰囲気を読んでか読まずか、臨機応変に対応。ヴィーブルくんはしゃべらないため、付き人のおねえさん（おにいさん）のトーク力やコミュ力も求められ、研鑽を積んでいる。事後、市公式 HP で自由すぎる活動報告を掲載。
(3)協働性
ロアッソ熊本や、市担当課、地域からのお招きに応じてイベントの応援に行き、会場を盛り上げている。参加メンバーはその都度チーム内で調整する。
(4)持続性
特定の担当課職員による活動ではないため、人事異動等でノウハウが失われることなくのんびり活動している。市公式 HP 内の掲載記事によると、結成後の活動回数は 平成 25 年度 7 回 平成 26 年度 31 回 平成 27 年度 19 回 平成 28 年度 2 回（熊本地震被災により活動休止期間があったが、10 月以降出演要請が来ている。）と、これからは被災地のゆるキャラとして、今まで以上に明るさと元気を届けていきたい。

名勝・重要文化的景観「おばすて（田毎の月）」の棚田の保全活動

矢島 重信（長野県 上田保健福祉事務所）

・棚田は稲作だけでなく、動植物を含めた豊かな自然環境や歴史的な文化、国土や環境を保全するなど、たくさんの多面的な価値と機能をもった、地域にとって大切な財産です。
・私たち同好会の活動は、後継者がなく荒廃地となりつつあった棚田の風情をよみがえらせるとともに、米づくりを通じて農業の大切さを学び、人と人とのふれあいを大切にしながら、ボランティア活動と小学生やその家族による農業の体験学習も実施しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

・長野県千曲市姨捨（おばすて）地区の棚田一帯は「田毎の月（たごとのつき）」と呼ばれ、古くから「名月の里」として有名です。
・しかしながら、耕作条件が悪く、農家の高齢化や後継者不足などから、手入れされない棚田や荒廃地が増えてきたことから、消えつつある棚田の風情をよみがえらせるため、米作りには全く素人の県職員の仲間７人が、1994 年に８ａの棚田を借りて米作り活動を始めました。
・翌年「田毎の月棚田保存同好会」を設立し、姨捨の棚田景観の保全に取り組み始めました。
・当時は、棚田景観の保全に取り組む団体がまったくない中での活動でした。
・その後、会員の増加に加え、保全管理する棚田も年々増加し、姨捨の棚田保全活動を積極的に推進しています。
・2005 年には、同好会独自に都市と農村の交流を進めるため、田植えと稲刈り農業体験ツアーを開催しました。
・こうした実績から、2006 年に「第２回石井進記念棚田学会賞」を受賞するとともに、棚田の保全に功績があったことから「千曲市長表彰」を受賞しました。
・現在、復元し耕作している棚田は６９枚・約６０アールまで広げることができました。

田植え作業
(毎年子供たちが参加します。)

稲刈りとハゼ掛け作業
(天日干しです。)

アピールポイント

(1)成果・効果
・1999 年には、わが国で初めて姨捨の棚田が「名勝」として文化財に指定されました。 ・同年に農林水産省の「日本の棚田百選」にも認定されました。 ・2010 年には長野県で初めての「国の重要文化的景観」にも選定されました。 ・2011 年に、私たち同好会の呼びかけにより、実際に姨捨地区で棚田の保全活動をしている団体による「意見交換会」を開催し、以後、毎年開催し情報交換を実施しています。
(2)チャレンジ性
・毎年、田植えや稲刈り作業には、小学生を中心に子供たちや保護者も含めて約 20 名の皆さんが参加しています。 ・子供たちは慣れない作業に泥だらけになりながらも、にぎやかに、一生懸命働いてくれます。 ・子供たちは、米づくり体験活動を通じて、お米の大切さや豊かな自然についても学んでもらいたいと思います。
(3)協働性
・本同好会には約２２年間において、延べ１０４名（うち県職員；41 名・市町村職員；7 名・国家公務員；6 名・警察官；2 名・保険会社社員；26 名・新聞記者；6 名など）の方が会員として活動してきました。県外からの参加者も延べ 30 名になります。 ・現在の会員は３０名で、長野県内のほか、千葉県・東京都・埼玉県・岐阜県からも会員としてボランティアで参加しています。

草刈り作業後の交流会です。

(4)持続性
・棚田は急傾斜地で、耕作条件や作業効率は大変厳しく、重労働の作業ですが「毎年耕作を継続することが一番重要」と考えています。 ・そのため、毎年、崩れてしまった土手や排水路の修復などの作業を、会員が行うことにより、地域のすばらしい景観等を保全しています。 ・同好会のテーマは「明るく・楽しく・無理なく・安全第一」です。このテーマをいつも大切にして活動しています。

剣道交流活動、音楽普及活動、ＰＴＡ及び学校運営協議会委員活動

瀬戸 要（佐賀県 文化・スポーツ交流局観光課）

【剣道】地域の道場や近隣の学校に出向き、剣道を通じた様々な方との交流の他、子どもの指導や審判活動など青少年育成に取り組んでいる。。欧州（パリ、バルセロナ）、アジア（上海、バンコク）等でも指導経験あり。
【音楽】地元のオーケストラの設立に携わり、自身もバイオリン演奏による音楽普及や、子ども向けのふれあいコンサート等も実施。
【学校】小学校ＰＴＡ役員（副会長、監査、父親委員長）として行事に関わるほか、学校運営協議会委員として学校運営等にも参画経験有。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

【剣道】小学校から始め、生涯剣道を目指して日々稽古に励んでおり、「交剣知愛(こうけんちあい)」と呼ばれるように、様々な方との剣道交流を楽しんでいる。自分を育ててくれた剣道に恩返しをするためにも、指導者としての段位と指導者資格を取得し、日本の伝統文化普及と青少年健全育成の観点からも、国内外において、子どもや若者の指導にも取り組んでいる。
【音楽】大学で剣道部に入るつもりが、魔が指してバイオリンを始めてしまい、最初はコツがつかめず、夏休みに帰省して実家で練習をすると飼い犬に遠吠えされる有様だった。今では地元のオーケストラで世界的プロと一緒に活躍できるまでになり、定期演奏会や子どものためのコンサート、地域おこしイベント等での演奏など行っている他、博物館や行政主催イベントでのアドバイザー的な活動も行うことも。
【学校】子どもの小学校入学を契機にＰＴＡ活動を開始し、父親委員長としてデイキャンプなどを実施したのち、執行部の副会長を経て、現在は監査として全体のチェック役をしている。また、学校運営協議会委員就任時は、地域コミュニティと学校が如何に連携するか、学校の運営目標や予算、学校行事をどうするのか等を議論した。

剣道

音楽

学校

アピールポイント

(1)成果・効果
社会人１０年目くらいまでは、趣味は仕事とは完全に別の「余計な物」という感覚がありましたが、最近はむしろ趣味や特技を通じた社会との関わや人脈がなければ仕事が思うように進まない、という感覚が強くなってきました。逆に自分の職場では何でもない日々のノウハウが、趣味の世界では異様なほど重宝されるという経験も増えてきました。コレステロールに善玉悪玉があるとすれば、「善玉公私混同」というと、やや言い過ぎでしょうか。
[波及性]例えば剣道とオーケストラのメンバーは、ある意味で正反対の特徴を持ったグループですし、ＰＴＡには、そもそも多様な方が参加されています。違う方との交流が多くあるからこそ、双方の違いや共通の価値観を理解できますので、各グループにおいてメンバーが悩んでいる際は、あえて異なる視点でアドバイスするなどにより、様々な取組をスムーズに行うとともにメンバーの資質向上にも寄与し、ひいては地域社会の向上に大いに貢献していると自負しております。
(2)チャレンジ性
私の場合は複数活動の同時並行のため、仕事（現在は観光地域づくり（DMO））と家庭も含めた分刻みのスケジュールを余儀なくされることも多いです。年代的にどうしても、同窓会をはじめとする「○○会」の事務局が集中するのですが、さらに自治会の班長まで回ってきたりして、「一体いつ仕事する暇があるの～！」と泣きたくなることもありますが、そのようなことも含めた「ムダ」こそが、まさに仕事での新たな発想や活力を与えてくれると信じて、今日も「プラス・テン？」活動を目指して精進しております。
(3)協働性
例えば、県主催の障がい者理解促進イベントや、東日本大震災で被災した一本松を使ったバイオリン演奏イベントの企画を担当職員と一緒に考えたり、小学校の運営をＰＴＡのみならず学校運営協議会委員として「協働」活動をしました。
(4)持続性
楽しくて、もうやめられません！(笑)

ごみ拾いからはじまる地域イノベーション「宮崎ベースキャンプ」

池袋 耕人、西 博之（宮崎市観光商工部商業労政課、都市整備部都市計画課）[宮崎県]

「ごみ拾いを通じて地域の課題解決」を使命に、*2015* 年に市職員を中心として「宮崎ベースキャンプ」を設立。市民と共に月 *2* 回のごみ拾いを実施(計 *720* 人参加)。参加者らとの対話から、「みんなで朝ごはん」、親子が共に学ぶ「読み聞かせ」、挑戦と夢を語る「夢プレゼン大会」、学生と社会人が"働くこと"を学ぶ「ジョブカフェ」などを創出。ごみ拾いがコミュニケーションの場となり地域の課題解決に発展している。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

2014 年に、部局横断で空き家の利活用を検討するプロジェクトチームが組織された。中心市街地の空き店舗解消策を提案し、その時に集まったメンバーから、宮崎の未来のために「できることからやってみよう！」という機運が高まり、2015 年 4 月に「宮崎ベースキャンプ」を設立。

活動の手軽さと継続性から、毎月 2 回の「まちなか清掃」をスタート。中心市街地のゴミ拾いや公園のベンチ磨きなどを行う。まちなか清掃から地域の課題に気づき、清掃後の「対話」から課題やニーズを明らかにし、地域プロジェクトに繋げている。実際に、月 1 回の「読み聞かせ」や、みんなで朝ごはんを食べる「朝ごはんプロジェクト」、本を持ち寄ってみんなの本棚をつくる「植本祭」などを実行。また、多世代交流スペース「よってンプラザ」の使い方を考える市民参加のワークショップを開催し、内装の一部もＤＩＹで仕上げた。今年 2 月には「宮崎を世界一挑戦しやすい街にする」をミッションに掲げる民間団体「宮崎スタートアップバレー」と共催で、プラネタリウムホールで夢を語る「夢プレゼン大会」を開催。本年 6 月から、学生と社会人が"働くこと"を学ぶジョブカフェも開始した。

毎月第 2、第 4 土曜開催の「まちなか清掃」後の集合写真

プラネタリウムで開催した「夢プレゼン大会」

アピールポイント

(1)成果・効果

まちなか清掃(計 36 回)、月 1 回の読み聞かせ(計 14 回/280 人参加)、ジョブカフェ(計 4 回/130 人参加)を実施。商店街の方や高校生を中心とした学生、市若手職員、民間企業など多様な人が交流する「場」となり、宮崎の課題や未来を考えるきっかけになっている。高校生がまちづくり団体の組織を計画するなど波及効果を見せている。活動から得られたネットワークや経験は、業務にも良い効果を与えている。

(2)チャレンジ性

ごみ拾い参加者との対話から、地域の課題を発見し、課題を解決するワークショップを開催。そこから、学生と社会人の対話の場「ジョブカフェ」が生まれた。ジョブカフェ参加者の高校生が、「全国高校生未来会議」の「地域おこしプランコンテスト」で私たちの活動をモチーフにして総務大臣賞を受賞。「夢プレゼン大会」(約 280 人参加)は、プラネタリウムを会場とし、公有財産の新たな活用にチャレンジ。そのことが、地元の新聞・テレビ等の報道に加え、全国紙「ソトコト」や「地域づくり」など、市外への発信にも繋がっている。

(3)協働性

商店街や民間企業の経営者、民間団体など、多様な組織・団体と協働して活動している。また、慶應義塾大学の保井教授と協働で、学生らも交えて半日対話するワークショップを開催。そこで学んだ手法から、市民が主役になる地域ワークショップを開催。 さらに、活動に参加した若手工務店が木育と木工教室を始めるなど、協働から新たな地域ビジネスを生んでいる。

学生と社会人が"働くこと"を学ぶ「ジョブカフェ」

(4)持続性

気軽に参加できる「まちなか清掃」を活動の中心に据えることで、常に新しい参加者を取り込み、活動に新鮮さを持たせている。現在は、イベントや講演を「ペイ・フォワード企画」と位置づけ、参加者から任意で寄付を頂いている。慶應義塾大学の齋藤さんと開催したときには 11,970 円集まるなど、会費に加えて安定的な活動経費の確保に努めている。今後はクラウドファンディングも企画中。

『わこまち探検隊』

前島 祐三（和光市 保健福祉部こども福祉課）[埼玉県]

和光市役所に勤める有志の仲間で、『わこまち探検隊』という自主研修グループを立ち上げています。自らの足で目で耳で、和光市内のグルメや、史跡・旧跡などの見どころを訪ね、紹介するとともに、自らの見聞を広め情報発信をしています。現在は、商工会青年部有志や街の若者有志とも連携・協働し『わこう未来創造研究所』という地域ボランティア団体を設立、和光市の地域活性化イベントなどの企画・運営活動も実施しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

市の職員有志が集まり、真に自主的な自己研鑽の場として自主研修活動を行うため、『わこまち探検隊』というグループを立ち上げました。最初は、和光市内のグルメ、史跡・旧跡、イベントなど和光市の魅力を、和光市内外の皆さんに楽しく紹介・情報発信していくことを目的に、ブログをはじめました。2012 年から、メンバーが日替わりで毎日必ず１回の更新を行い４年半が過ぎました。和光市民の皆様を始め、市内外の事業者の方々、商工会、青年会議所、行政職員など、多くの方々に愛読いただいております。また、この活動を通して飛び出したおかげで、2012 年当時に流行っていた“街コン”を自分たちの手で企画することになりました。市内の飲食店と連携し、市内を回遊しながら男女の出会いの場を提供する婚活イベント『WA@KO コン』は、我々の初めての企画としては大いに街を賑わし、大成功を収めました。このイベントがきっかけとなって、「わこまち探検隊」と和光市商工会青年部の有志の方を中心とした地域の若者が自然に融合し『わこう未来創造研究所』という地域活性イベントを自主企画、自主運営する団体を立ち上げることになりました。今では、地元ミニＦＭ局、ＣＡＴＶ局、市内に在所する本田技研工業株式会社、元素１１３番を発見した独立行政法人理化学研究所、小惑星探査機はやぶさプロジェクトに参加した株式会社原田製作所など、地元の様々な方々と交流し連携を深めながら、和光市の皆さんと一緒に楽しめるようなイベント企画し、飛び出した仲間と一緒に楽しみながら運営しています。

アピールポイント

(1)成果・効果

これまでにも、和光市出身の映画監督をはじめ、宇宙船“はやぶさ”の精密部品を手掛けた和光市の原田製作所、和光市出身で紅白出演やＣＭでも活躍し、リオ・オリンピックでは吉田沙織選手を応援した「我武者羅應援團」、和光市在住の都市アーバンデザイナー、和光市出身のフルートのソリスト、和光市在勤のヨーヨー世界チャンピオン、和光市出身で映画の主演級を務めるタップダンサーの清水夏生さんなど多くの方々と知り合うことができました。イベント事例としては、和光市出身の映画監督とは、『シネマコミュニケーション』と題して、映画作成というツールを活用し、人と人とのコミュニケーションを円滑にできる能力を高めるワークショップを実施しました。また、堅苦しい会議室を飛び出し、アルコールを片手に“おとなの科学”を気軽に楽しむための『サイエンスバー』を企画し、市内企業の技術者や研究者の方に講演をお願いしました。これは、市内企業の成果の発表の場でもあり、市民は、研究者の生の声を間近で気軽に聴講できるチャンスであり、おとなの科学の心をくすぐりました。この他にも、『和光市駅前ジャズフェスティバル』など発想力と機動力で次々とイベントを展開してきました。これらの活動を通して、様々な人との信頼関係が構築されていき、結果として公の場でも円滑な関係を築くことができました。

(2)チャレンジ性

『わこう未来創造研究所』では、市や商工会では馴染みにくい企画や、小さな試みも独自の視点で自由に発想し、思いたったら即行動する機動力を武器に、自らも楽しみながら実践できるイベントを企画・運営しています。和光市の隠れた多くの人的資産を発掘し、市民に広め、地域を盛り上げるイベントを中心に活動を展開しています。

(3)協働性

『わこう未来創造研究所』は、飛び出した有志の行政職員のみならず、商工会青年部をはじめとした地域の青年や事業者、ボランティアの方々、そして様々なジャンルで活躍する多くの方々とコラボしながら地域の輪を広げ活動しています。

(4)持続性

そして、『わこう未来創造研究所』は、今年で３年目になるランバイク競技大会の企画・運営を実施しています。和光市にある教習所レインボーモータースクールで年１回開催されるお祭りの一角をお借りし、３歳～５歳の子ども達が真剣にバトルを交わす本格的なスポーツ競技です。ホンダやレーマンチョコなど地元企業も様々な形でバックアップしてくれるようになりました。選手（子どもたち）も全国から集まってくれるほどになっています。我々『わこまち探検隊』は、飛び出した結果、多くの仲間と繋がり『わこう未来創造研究所』へと成長し今も“自分も人も街も楽しませる”そんな活動を続けています。

豊かな学びの共同デザイン（地域資源と教職的技法のリンク推進）

浦崎 太郎（岐阜県立可児高等学校）

地元小学校区で「まちづくり協議会」設立に参画。子どもと大人が一緒につくりあげるイベントを立ち上げる等、社会参画意欲や学力が高まる地域環境とは何かを模索しつつ、実践してきた。別途、行政職員有志とファシリテーション研修を重ね、行政と小中学校との橋渡しを通して総合学習等の充実に貢献。現在は、校外で培った技能や人脈をフル活用し、地方創生と高校キャリア教育を一体的に推進するモデルの確立や普及に尽力している。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

十数年前、高校教師として学力低下問題の根源を探るうちに、地域の教育力低下やまちづくりの重要性に思いが至り、ファシリテーション技法を習得、地元に飛び込んだ。同じ頃、人事交流で勤務した山間部の中学校でも、ふるさとを担う若者の育成を学校と地域が協働してすすめるＮＰＯの設立に参画。一連の経験を通して、「学習意欲の向上には、外遊びや大人との“共汗＆共感”体験を通して、大人や地域に対する一体感を高めることが有効」と気づき、以後、まちづくりと人づくりを一体的に推進できる仕掛けを工夫してきた。
その後、県内公務員有志の会に参加。ある市の職員から「総合学習を活性化したい」と相談を受け、行政・学校・市民団体等による企画組織の立ち上げを支援し、それまでにない魅力的な学習活動を実現。地域の資源と教職的な技法を融合する威力や楽しさを皆で実感した。
一連の経験をもとに、現在は勤務先の高校において、地元自治体・市民団体・市民有志等とともに「まちをよくしようと頑張る大人との出会いや交流を通して自身や地域の将来を描かせるキャリア教育」の確立に尽力。休日は、同様の仕組みを広く普及する全国的な交流母体の運営に勤しんでいる。

アピールポイント

(1)成果・効果
上記の総合学習では、既に企画運営の段階で楽しさを共有できたほか、生徒が学習活動を通して見事に成長していく姿を通して関係性がよくなり、地域の学校に対する、教師の地域に対する当事者意識も高まった。現任校が関わるキャリア教育では、学習意欲や地域貢献意識が飛躍的に高まる生徒も出現。「まちづくりに高校生を迎え入れると地域の持続可能性は向上する」という認識が着実に共有され、昨年度までに、地元が夏休み等に用意する数十種類の地域体験プログラムに、勤務校から１年生全員を送り込む仕組みが稼働するに至った。
(2)チャレンジ性
地域再生や地域の教育力向上に教師が貢献したという事例をほとんど耳にしない中、教師ならではの高い教育力を、地域に飛び込み、地域で発揮してきた点で特筆に価する。
(3)協働性
異質協働は最も得意とするところであり、例えば、子どもが自然に親しめる地域環境をつくる教育的な価値を共同発信するシンポジウムの内容を河川関係者と共同で練り上げた実績をもつ。現在尽力中の例では、自治体（行政・議会）・諸機関・市民団体・企業・市民有志等が高校生と活動を共にするプログラムを提供する地域的な仕組みの確立に寄与してきた。

(4)持続性
残念ながら、学校は多忙であるほか、学校も自治体も人事異動の頻度が高いため、人と人との信頼関係が礎となる連携体制の中核は担い得ず、一連の実践は短命に終わってきた。こうした教訓から、現在の実践では、連携の担い手として、地元在住の適任者を核に専門のＮＰＯを立ち上げ、安定性の向上をはかってきた。また、それでもなお高校と地域の連携体制は弱いため、広域的な研修交流母体も含め、「地域の課題解決に、大学が専門性やマンパワーを投入し、その現場に高校生を迎える」という、高校～大学～地域による三者連携の確立や普及にも努め、見通しをもちつつある。

地元出身の若者とともにガイドブック「銚子人」発行とコミュニティづくり

小足 雄高（銚子市 健康福祉部子育て支援課）［千葉県］

徐々に活力を失う地元を何とかしたいと首都圏の銚子出身者と銚子の魅力的な人を紹介するガイドブック出版を企画し、平成２７年３月に発行。費用は、銚子市民の寄付や、共感いただける方向けのクラウドファンディングを活用した。市民参加のワークショップを行い、銚子人の候補を選出。地元信用金庫の職員などと約２０名のチームとして活動。出版後、出版の企画会社やＮＰＯ法人と連携して、「銚子人に会いに行く旅」を２回実施。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

地域に挑戦の生態系を作り出すことを目指して、東京のＮＰＯ法人ＥＴＩＣ．と連携し、首都圏の社会人と銚子地域の課題解決に取り組むアカデミーを平成２３年度に、また地域で新たなものにチャレンジしようとする銚子の経営者を支援するため、実践型インターンシップを平成２４年度に開始した。

そんなとき、銚子出身者向けＳＮＳに力武さん（現制作委員会代表）から、銚子人出版を行う仲間集めの投稿があり、銚子人制作のきっかけとなったガイドシリーズの前作である「福井人」の完成報告会に銚子出身者３名と参加し、その場で制作員会を組織し、制作することとを決定しました。

銚子人制作委員会

個人的にもこの書籍を創りたいとは思っていましたが、銚子出身の方々が自分の時間とお金を使って、銚子のための活動するのを支援し、成功させることが出来なければ、きっと後悔するだろうと思い、活動を開始しました。

平成２７年３月に無事出版し、現在４０００部発行。それをもとにしたツアーをＮＰＯ法人２団体と共催し、「人に会いに行く旅」を平成２８年１月に開催しました。ツアー参加者、アテンドした銚子人双方から良かったと言っていただき、実際にビジネスにつながった事例も生まれました。

チーム銚子人

アピールポイント

(1)成果・効果

いかに風光明媚な風景やおいしい食材があっても、地域でそれを伝える人との出会いが無ければきっとその地域への観光は継続しません。その人との出会いをコーディネートできる書籍銚子人はまさに地域に求められるものであり、それを全国販売できたインパクトは大きいと思います。しかし、それよりも活動を通じて、銚子出身者やツアーに参加した方々と地域がつながり、銚子ファンのコミュニティが出来たことが何よりの成果です。

(2)チャレンジ性

あまりチャレンジしたという実感はありませんが、月に二度の東京でのミーティングを行い、実際に行けない場合にはスカイプなどを活用してコミュニケーションを取りつつ、実際に寄付を集めて地域を回る場合などは、ほかのメンバーの方々に助けられながら行いました。一方、出版後のツアーは2回ともガイドとして地域、そして銚子人の魅力をお伝えしました。

ワークショップ風景

(3)協働性

地元の銚子信用金庫さんをはじめ、町内会長さんや事業者さんなどが、お金集めから銚子人候補出しまで、まさにチーム銚子人として一緒に活動をできたことが何よりの協働だったように思います。また、出版後のツアーは、東京のＮＰＯ法人ＥＴＩＣ．さんやシブヤ大学さんと共催で実際のツアーを開催しました。

(4)持続性

活動当初から、出版して終了ではなく、作る過程のコミュニティづくりに価値があり、そして作った後にこそ私たちの活動の本番が始まっていると考えています。引き続き地域の方々、ツアーで参加してくれた方々と一緒に、ツアーという形だけでなく、首都圏と銚子をつなぎ続ける活動を行っていき、人“交”密度を高めたいと思っています。

「ゆるエコ」で「エコにこっ！」

藤本 雅彦（加古川市 環境部環境政策課）[兵庫県]

加古川市職員有志の自主研究グループ。*LED* 電球をモチーフにした「エコがわさん」はじめ、*17* 種のゆるキャラを制作し、活用。

地元食材を使った地球にやさしい「恵幸川鍋（えこがわなべ）」を開発。鍋に関わる市民と「恵幸川鍋同盟」を結成し「恵幸川鍋五訓」を制定。ご当地鍋として飲食店で提供し、全国ＰＲを見据え、地域活性化を目指す。市民協働でイベントにも出店。ゆるーく楽しく「エコにこ！」の輪を広げている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

今から 10 年前、加古川市のために仕事では成し得ない内容で、何か自分にできることはないだろうかと考えていた頃、地域に飛び出し、身近で志高く活動されている同年代の公務員との出会いがあった。その取組に触れ、本人と飲み語り合う中で大きく心が動かされ、勉強を重ね、初志は揺るぎないものへとなった。そして、ゆるーいエコで加古川を元気にしたいという強い想いからメンバーを募り、「ゆるエコ」「ゆるキャラ」「ウェルネス」「笑い」「低予算」をテーマに本格的に活動を始めた。そして、すべてのテーマを満たす手法として、ご当地鍋による地域活性化を思いつき、ありそうで無かった全く新しい鍋を、地元の特産品で創り出すことに成功した。この鍋を食べていただくことで、低予算でエコと地域活性化が実現できるため、より多くに方々に知って、食べていただくため、イベントで出店ＰＲや、居酒屋等でのメニュー化に挑戦した。

六甲山で 100 万ドルの夜景を見ながら恵幸川鍋をＰＲ

ローマ法王に米を食べさせた男に恵幸川鍋を食べさせた

アピールポイント

(1)成果・効果

「エコがわさん」は幅広い年齢層に親しまれ、市民に浸透してきている。小学校、幼稚園や PTA 等でも環境教育等に活用していただき、楽しみながらエコの啓発が行われつつある。各種の取組が評価され、「eco 検定アワード」で優秀賞を、加古川市長賞を受賞した。また、恵幸川鍋については、フード･アクション･ニッポン 2015 で入賞し、現在、市内８店舗、市外３店舗でメニュー化されている。新聞や雑誌、ラジオ等にも取り上げられ、10 月中には「恵幸川鍋の歌」も完成し、さらなる地元の活性化を目指す。

(2)チャレンジ性

開発した「恵幸川鍋（えこがわなべ）」を採用する店舗をさらに増やし、地元食材の市域流通経路を開拓する。イベントにも出店し、地球温暖化防止を訴えるとともに地元食材の消費を促す。また、地域のＦＭ局とタイアップし「エコがわ音頭」「恵幸川鍋の歌」を制作するとともに、老人ダンスチーム「エコがわダンサーズ」をつくる予定。イベント等でゆるーく市民を元気にすること目指す。

(3)協働性

地元の飲食店、農家、酒造、味噌蔵、商工会議所、ＦＭ局等と連携し、地産地消を推進しながら、ともに「HAPPY-HAPPY」の関係を築いている。

(4)持続性

恵幸川鍋は、今後もさらなる展開を目指し、加古川市を代表するご当地鍋として、全国に PR していきたい。

恵幸川鍋市内１号店デビュー

「発酵の里」非公認リアル・キャラ『お里』参上！

澤田 聡美（神崎町 まちづくり課）[千葉県]

「発酵の里」を掲げ、地域づくりを進める神崎町の非公認キャラクター『お里』を作り上げ、あちこちに出没しています。子ども達を対象にした発酵教室。「人も発酵する町」と称した講演活動など、千葉県で一番小さな町の魅力を知ってもらうため勝手に手を挙げたものばかりです。地域の仲間と *120*%神崎びいき「めだか通信」の発行も、町の祭礼に初の女神輿を登場させたのも４年前。今では新旧の住民が一緒に神輿を担いでいます。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

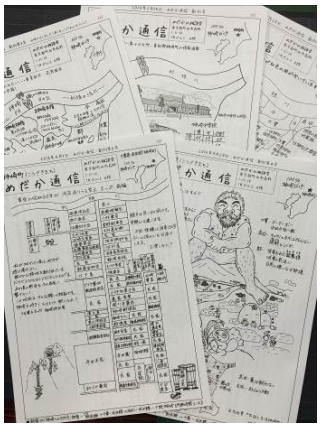
『お里』の誕生　平成 25 年３月、町のゆるキャラ『なんじゃもん』が誕生した時に、その私設秘書のようなリアル・キャラクター『お里』を考え、着物と前掛け、姉さんかぶりの手ぬぐい姿で、自分自身がキャラクターに扮するようになりました。お里の使命は神崎町の素晴らしさ、魅力を知ってもらうこと。とくに地元の子ども達に自分の町を誇りに思ってもらうことです
「未来に繋ぐお里の発酵教室」を通し、子ども達と発酵文化について一緒に学んでいます。
「人も発酵する町」と題して講演活動を行い、発酵や発酵食品に興味を持つ人の裾野を広げています。平成２４年宝くじ助成を活用して古い神輿を修繕、近隣市町でも初の女神輿も作り上げました。年々担ぎ手も増え、２年前には揃いの半纏を新調。町のお祭りを華やかに盛り上げています。自分たちの暮らす町、生きた証を残したいという思いで、自費出版の超ミニコミ紙『めだか通信』も発行。もちろんお里自身も取材に飛びまわります。おかげで、町の歴史や、きらりと光る人、地元の人も知らなかった名店、散歩の穴場など、さまざまな町の財産が浮かび上がってきました。めだか通信は駅、図書館、小・中学校に配布しています。

未来に繋ぐ「発酵教室」

「発酵娘」揃い踏み

アピールポイント

(1)成果・効果
お里自身が神崎町で暮らすことを誇りに思い、魅力を楽しく発信することで、神崎町に親しみを持って訪れる方が増えました。超ローカルな情報にこだわる『めだか通信』は、地元の人の関心が高く、外から来た人が神崎を知るためにも役に立っています。同窓会でも配布し、町外へ出た人たちにも懐かしいと喜んでもらっています。
(2)チャレンジ性
お里のコンセプトは「楽しい事をちょっと勇気を出してやっちゃおう！時は待ってくれない」です。視察、出張イベント、勉強会…いつでもどこでも「お里」で登場し、皆さんの度肝を抜いています。
(3)協働性
お里は、地元の皆さんの力と理解をいただいて活動しています。ワラづと納豆造りや発酵体験は、地元の農家さん、レストランや食堂のみなさん蔵人さんたちと一緒に大豆や稲ワラを準備しました。お里の着物は着物リメイクの活動をしている地域のおかあさんたちの手によるもの。めだか通信は、特派員と称し町をよく知る人たちも協力してくれています。
(4)持続性
「発酵の里のお里」「女神輿」「めだか通信」、活動はいずれも４年目になりました。お里の応援団も年々増え、活動がしやすくなってきました。今後は味噌や甘酒以外にも、珍しい発酵体験教室（テンペ、柿酢、納豆造り）などを実施していきたいと思います。



120%神崎びいき「めだか通信」

社会に居場所と出番を～地域の仲間と取り組むテレワーク推進活動

大橋 志帆（太田市 産業環境部工業振興課）[群馬県]

多様で柔軟な働き方として，テレワークの必要性が高まっている状況を踏まえ，当事者意識でテレワークの普及・推進に取り組む。自主研究会「テレワーク・カフェ」として，様々な機会を捉えて情報発信を行うとともに，学びの場の提供や課題解決に向けたネットワークづくりを行う。*2016* 年 *7* 月には，自主研究会の活動支援メンバーが中心となって，テレワーク機能を持った地域の居場所づくりに取り組むという動きも出てきている。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

2012 年に地域活動をスタート。2013 年 7 月，テレワークに強い関心を持ち，東京開催のセミナーに積極的に参加しつつ，人脈形成に努める。2014 年 3 月，総務省地域情報化アドバイザー派遣事業により，テレワーク第一人者・田澤由利氏を NPO 法人 在宅はたらき隊に招致，アドバイスを受ける。同年 3 月，自主研究会「テレワーク・カフェ」設立。メルマガ「テレワーク・カフェ通信」配信（現在 94 号），テレワークセミナー開催（4 回），意見交換会開催（2 回）。テレワーク推進活動を含む自身の足跡を記したレポートで「2014 年度 （公財）日本女性学習財団賞 選考委員特別賞」受賞。活動をさらに深化させるため，2015 年 7 月，同財団からキャリア形成支援士の認定を受ける。同年 11 月，上毛新聞オピニオン 21 の委員に選ばれ，1 年間に 7 本の原稿を執筆。2016 年 4 月 1 日，これらの実績により太田市役所産業環境部工業振興課へ配属となり，ハローワークとの共同窓口「お仕事相談パークおおた」を担当。同年 7 月 23 日，自主研究会テレワーク・カフェの活動に触発された熱意あるメンバーにより，民間主導の「おおたテレワーク推進協議会」が設立された。

活動メンバーとのミーティング風景

アピールポイント

(1)成果・効果

地域に飛び出す公務員ネットワークや自主研究会メルマガでの情報発信，セミナー開催を継続的に行うなかで，テレワークに関心を持つ人は確実に増えてきた。テレワークは，出産・育児・病気・介護等による離職を防ぐほか，男女共同参画，雇用促進，ひとり親や障がい者の自立支援,災害時の業務継続等，幅広い分野に活用できる仕組みである。このテーマに取り組むことは，公務員としての成長につながっている。

(2)チャレンジ性

活動を始めた頃は，テレワークについて関心を示す人は少なかったが，諦めずに必要性を訴え続けたことで，共感者が増えてきた。「2014 年度 （公財）日本女性学習財団賞」への応募では、テレワーク推進を含むこれまでの活動を振り返り，『公務員の使命とは何か―私が「地域に飛び出す公務員」となるまでの軌跡』で外部評価にチャレンジ。選考委員特別賞を受賞，「私のまちにもこんな公務員がいたら良いなと思わずにはいられません」との講評をいただいた。

(3)協働性

地域活動を始めるにあたっては，神奈川県庁職員のかたわら NPO 法人パブリックリソースセンター代表理事を務める久住剛氏からアドバイスをいただいた。「熱意を失わずに，とにかく粘り強く，諦めずにやり続けていけば，必ず道は拓けます。」この言葉が大きな後押しとなり，今も活動の原動力となっている。テレワーク第一人者・田澤由利氏をはじめ，多種多様な団体・個人とつながることができ，人が人を呼ぶといった好循環が生まれている。

2014 年度（公財）日本女性学習財団賞 選考委員特別賞

視点

社会に居場所と出番を

上毛新聞オピニオン委員
第 6 回記事掲載（2016.8.19）

(4)持続性

テレワークはこれからの社会に必要な仕組みである。飛び出す公務員の活動は，人事異動に左右されず，ライフワークとして取り組むことができる。活動を進める中で共感者・協力者が増え、民間主導の協議会も設立された。地域の仲間の熱意・自主性を大事にしながら，今後も住民目線で活動を持続・発展させていきたい。

人つなぎの旅～ 子ども・若者の夢実現の応援をテーマに地域に飛び出す公務員活動 ～

中尾 雅幸（武雄市 総務部税務課収納対策室）[佐賀県]

“子ども・若者の夢実現のお手伝い”をテーマで、誰でもまねできる単純明快な活動を行ない、地元だけでなく、全国へ成果の普及活動も行っている。具体的活動内容は、*[1]*武雄中学校と家庭・地域の連携を推進する“武中のちから”で学校と地域をつなぐコーディネーターを務める（平成 *28* 年度はアドバイザー）、*[2]*福岡で高校中退者等の夢実現を応援する、一般社団法人ストリート・プロジェクトでボランティア講師、普及イベントのスタッフを務める。*[3]*フリーの立場で、小中高校生、大学生の夢実現のための活動を推進するための情報提供と個別アドバイスを実施。*[4]*この２つの活動成果をブログ等で全国へ発信し地域力による「総合的育ちの環境づくり」と普及を実践。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

農林水産省に 15 年勤務。うち３年間の現場事務所勤務、６年間の市町への出向経験から、より現場密着の仕事がしたく、まちづくりコンサルタントに転身。10 年間、小中高生、市民の意見を取り入れた総合計画づくりや商店街を舞台にした小学生のキャリア教育を推進。市民とともに創る魅力あふれるまちづくりを行うため、48 歳で武雄市役所に中途入庁し出戻り公務員となる。業務終了後に家から徒歩３分の中学校に押しかけ、中学校と地域をつなぐコーディネーターを志願し地域との連携によるキャリア教育推進等を担う。以上の経験から長崎県の学校支援コーディネーター養成講座の講師を務め、福岡県での中学生、若者支援活動も行っている。また、小中高大学生の地域活動や将来の夢実現のため取り組みに対し、活動推進のため必要な情報提供や組織・人材との橋渡しをフリーの立場で行っている。

武中のちからパンフレット

アピールポイント

(1)成果・効果

小学生から大学生と地域の大人の橋渡しすることにより世代間交流が推進され、子どもたちには自己肯定感や郷土への愛着心を醸成し、郷土のためにアクションを起こす人材が育ってきている。また、地域の大人が子どもたちと関わることにより、生きがいづくり、協創による地域づくりにつながっている。また、所属する活動団体を武雄、福岡の２つに絞り、フリーの立場で活動する時間を増やしたため普及活動が可能となっている。

学校と地域の連携活動については佐賀県の事例報告会を通じて、県内の小中学校へ、また長崎県の学校と地域の連携を担うコーディネーター養成講座の講師や視察等の受け入れも行い、活動成果を県内外に普及している。また、福岡県志免町社会福祉協議会に地域ボランティアによる学習支援の取り組みの情報提供を行い、活動の推進につながっている。

(2)チャレンジ性

ブログ（中尾雅幸の人つなぎの旅）と facebook を併用した情報の共有と発信を行っている。活動の予告、経過、結果報告はもちろん、グループ機能を活用し、情報を共有することで『行動ができる時のみの参加』することが可能な仕組みを構築している。これにより地域に飛び出す公務員活動の課題である「多忙により参加できない」という悩みが解決した。また、小中学校の指導者や大学生とは、継続した情報交換が可能となり、地域活動への協力要請や就職活動の個別アドバイスを行っている。

地域の大人と中学生の意見交換会

(3)協働性

市民協働課、生涯学習課の勤務経験を活かし、市内各団体、教育委員会事務局等の関係機関と共有し協働体制を構築している。また、全国での活動経験や九州地域オフサイトミーティング等で築いたネットワークより九州をはじめ、全国の地域に飛び出す公務員の皆さんの協力をいただき、情報拡散や人的支援等をいただき協働体制を築いている。

(4)持続性

私や私はつないだ方からのアドバイスにより進学や就職が実現した大学生、社会人が中高生へのアドバイスを行うなど地域における正のスパイラル現象が起こり、世代間の交流・連携が広がりつつある。また、フリーの立場で活動することで、今、支援を必要としている団体にピンポイントで情報提供や人つなぎを行い継続的な活動支援につながっている。

地域とボランティア希望の
高校生をつなぐ

Let's Oh!ばんざい

晴佐久 浩司（農林水産省 近畿農政局）

核家族化や共働き世帯の増加により、家族そろって食事する機会が減り、家庭内の食習慣が乱れています。”食”は人を良くするという言葉どおり、食を通じて子供は食べ物に感謝する心や食事マナーを身につけていきます。

家庭で料理するきっかけづくりを目的として、「家庭の日」である毎月第４日曜日に「おばんざいパーティ」を実施しています。旬の食材を使っておばんざいを調理し、有識者から食文化にまつわる講和を聞き、楽しい食の場を提供しています。また、地域の子育て世代を対象として、おばんざい料理教室も開催しています。

京都の家庭料理であるおばんざいの価値を再認識し、家庭から地域へと広め、食文化を受け継いでいくことを目指しています。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

個人的に食を通じたコミュニティづくりに取り組んでいた折、2012 年に京都市から未来まちづくり１００人委員会の委員に推薦され、市民有志で「Oh!ばんざい」を立ち上げ、京の食文化＝おばんざいの普及活動を開始しました。

主な活動である「おばんざいパーティ」は、これまで３年間で３１回開催し、延べ８３４人参加しています。また、地域イベントへの参加やおばんざい料理教室の開催、更には田植え・稲刈り等、大人への食育活動を展開してきました。こうした活動の継続性が認められ、京都市の「健康長寿のまち・京都市民会議」の理事として選任され、食生活の改善につながる提案を行っています。

これからも、交流を通じてみんなで食事を楽しむ文化を見直し、他人同士が親戚のように付き合うようなつながりの輪を広げていきたいと考えています。

アピールポイント

(1)成果・効果

Oh！ばんざいは、京都新聞への掲載、京都市広報誌への掲載、コミュニティ・ラジオへの出演、雑誌 Reaf への掲載など広報を展開しています。

おばんざいパーティへの参加者は毎回定員を上回り、計３１回で延べ８３４人を超え、facebook ページのいいね数は６９０件となりました。

その結果、おばんざいパーティにて調理や食事を通じておばんざいの良さを実感し、家庭でおきまり料理を実践している参加者もいます。また、ホームパーティでおばんざいを提供したという参加者も現れています。

(2)チャレンジ性

おばんざいパーティを核として活動を継続し、たこ焼き、鍋、BBQ などと同じように、ホームパーティの定番として実施されるよう、社会的なムーブメントを巻き起こしたい。

(3)協働性

Oh！ばんざいは、京都市主催のまちづくりミーティングで集まった市民有志が始めたもので、京都市だけでなく京都府や近畿農政局の食育関係のネットワークに参加しています。また、地域で活動している NPO 等とも連携して料理教室などのプロジェクトを展開しています。

(4)持続性

活動を開始して５年が経ちネットワークが広がり、様々な団体と連携しておばんざいの普及活動を展開しています。活動資金は参加費にて得ており、継続的に活動を続けています。来年度は助成金を取得し、活動の横展開を図っていきたいと考えています。

おばんざいパーティ

おばんざいを囲み、歓談する参加者たち（京都市中京区・京料理店「松兵」）

一緒にやろうよ

Oh！ばんざい（京都市中京区）

京都の伝統的な家庭料理「おばんざい」を次代に伝えようと、月に一度「おばんざいパーティ」を開いた店舗を繰り返している。

パーティーは毎月第4日曜の夜、京都市中京区の料理店で開催。使ったばんざい、調理法を紹介する時つくり、参加者が自分の分を作った。

「出汁が地域活性化事業をやるなら」と同市。

「おばんざいは、家庭料理の一つ。食事を楽しむ文化を見直し、他人同士が親戚のように付き合うようなつながりの輪を広げていきたい」と話す。

今年で5年目。20人で始まったパーティーは、毎回定員を上回り、計31回で延べ834人を超え、facebookページのいいね数は690件となった。

その結果、おばんざいパーティにて調理や食事を通じておばんざいの良さを実感し、家庭でおきまり料理を実践している参加者もいる。また、ホームパーティでおばんざいを提供したという参加者も現れている。

初回のパーティーから3年がたち、新規の参加者が増えた一方、毎回顔を出す「常連」も出てきた。

単身赴任で京都に住む会社員や子育て中の主婦、京野菜に詳しい料理人、さまざまな職業の人が参加した。この日は、「ゴマ豆腐」を作ったり、京野菜を使った料理を味わったりした。

「家族そろって食べるのはいいことだ」と参加者。

「みんなで食べるのは楽しい」と話す。

（2月2日、中京区の京料理店「松兵」で）

食文化、次世代に伝える

Oh！ばんざい（おばんざいパーティー）への参加は2日開催までの申し込みが定員一杯。参加費は500円。問合せは、中京区の京料理店「松兵」（075・256・2121）へ。

京都新聞記事

料理教室

「鳥取の絆」同窓生ネットワークでふるさと鳥取を盛り上げよう！

佐々木 寿（鳥取県 県土整備部八頭県土整備事務所建設総務課計画調査室）

母校の同窓会活性化のため、設立５０周年を記念してイベントを企画。題して「ありがとう鳥取感謝祭」。県内外の同窓生や市民が集い、親睦を深めれば、同窓会の活性化だけでなく、ふるさと鳥取の活力につながると考えて、既存の同窓会活動の枠を超えた大型イベントを実施し、市民を含めて４千人を集客した。

また、同窓会入会式で、新卒の生徒に同窓会活動をプレゼンし、故郷を思うことや同窓会をすることの大切さなどを伝えた。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

同窓会活動を始めたのは３年前の夏。活動のことは、全く知らず、後輩に声をかけられて、同窓会総会に参加。５０周年記念の同窓会をしようと、先生に話しかけられ、常任幹事を任される。５０周年記念同窓会の企画について、企画段階から業者に全て委託して実施するという話を受け反発。

自分たちの同窓会活動には、自分たちの総意を反映させ、活動を対外的に周知させるため、情報発信に力を入れるべきと力説した。以後、同窓会会員と相互に協力し、ワークショップと学校との協議を重ね、市民参加型のイベントを実施することについて合意形成を図った。

５０周年前年には、５０周年プレイベントで１，５００人を集客。５０周年には４，０００人を集客し、地域の活性化に寄与した。次回は３年後のイベントを実施するよう計画中。

また、同窓会の事業内容を明文化、内部牽制強化、活動の活発化等を図るため、メンバーとともに同窓会規約を改正する一方、facebook による活動の見える化など、情報発信に力を入れている。

一方で、同窓会入会式では、新卒の生徒に同窓会活動をプレゼンし、故郷を思うことや同窓会をすることの大切さなどを伝えている。

同窓会ワークショップ

同窓会イベント

アピールポイント

(1)成果・効果

同窓会５０周年イベントとして４，０００人を集客。初めてのイベントであったが、歩行者天国を事故無く無事に開催することができた。同窓会活動を目に見える形でアピールすると伴に、同窓会会員や在校生が地域の人たちと触れ合うことによる地域の活性化を図ることができた。 一方で、同窓会入会式や学園祭では、生徒に対して同窓会活動をプレゼンし、故郷を思うことや同窓会をすることの大切さなどを伝えた。

(2)チャレンジ性

同窓会の企画により、初めてのイベントを実施したこと。 チラシ作り、出展者調整、後援取り、事前ＰＲ番組出演など、全てが初めてで手探り状態だった。 同窓会会員とともに、一致団結し無事開催することができた。

(3)協働性

同窓会会員によるワークショップを実施。ファシリテーター役として、同窓会としてやりたいことやイベント内容等の知恵出しや意見集約を図った。最終的には、ワークショップで決まった内容を同窓会の活動の方向性やイベント内容に反映させた。また、イベント実施に当たっては在校生を取り込むため、学校と共催で実施した。 その他、同窓会の事業内容を明文化、内部牽制機能の強化、活動の活発化等を図るため、メンバーとともに他校の真似るべきところを情報収集し、同窓会規約を改正した。

同窓会入会式プレゼン

(4)持続性

一番難しいのが持続性である。アフター５の活動として、大きなイベントを実施するのは大変難しい。継続的な実施が出来るよう、感謝祭の様な大きなイベントは、３年に一度とし、それまでは会員相互でワークショップや茶話会、砂丘ボランティア清掃活動などを行い、会員の交流を深めることとしている。

おもしろ道職員勉強会『ＤＯ！２１』

米一 彰夫（北海道 農政部食の安全推進局食品政策課）

道職員を主体に、他の自治体職員や民間の方もまじえながら、タイムリーな話題や興味あふれるテーマを題材に、庁内外から講師を迎えたり、メンバーの自主的な発表の場として、月１回の例会（勉強会）を開催。地域の方々と交流する「夏合宿」や、*12* 月には異文化体験をまじえた「望年会」も。このほか、お昼休み時間に、福祉施設のお弁当をいただきながら、一人ずつ２分間スピーチをする「わくわくパワーランチ」を月２回実施。

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

◆道庁本庁舎には約３千人の職員がおり、「町」に相当する“人口”があったこと、当時「一村一品運動」の担当だったことから、道庁の“まち起こし”をしようと、世代や部が異なる有志３人で発案。まずは、庁内の所属や年代を超えた人と出逢い、知ることから始めようと、平成６年に『ＤＯ！高夢ｉｎｇ（コームイン）』をスタート。
◆月例会（勉強会）の開催や、おもしろ道職員・自己アピール集「ＡＭＩＤＡＳ」、活動情報誌「キラリ！ＡＭＩＤＡＳ」の発刊等を行う。（まだ電子メールが普及しておらず、紙ベースで作成・配付）
◆１１年に主要メンバーの転勤等により活動を一時休止したが、１６年４月に、市町村職員や民間人もまじえて『ＤＯ！２１』として再スタートし、２８年９月までに、月例会を１４３回開催（うち合宿５回）。２７年１月から開始した月２回の「わくわくパワーランチ」は３５回開催。
◆『ＤＯ！』は、北海道の「ＤＯ」と実行の「ＤＯ」を表し、活動を通じて、自己啓発の場としてお互いを高め合うとともに、新たな出逢いから、所属や部局、役職を超えたネットワークづくりを進め、活力ある北海道の未来を創造することを目的としている。

月例会（勉強会）の様子

夏合宿（太平洋を望みながら道産小麦パンの朝食）

アピールポイント

(1)成果・効果
◆例会の講師は、地域活動を行っている方などを中心に選定し、参加者も、道職員、市町村や国の職員（派遣を含む）、民間の方々にも、メンバーの口コミで広げるなど、本活動での出逢いをきっかけに、各々が携わる地域活動等に関わったり、応援を促進するネットワークになっている。 ◆メーリングリスト（ＭＬ）を設定し、参加者や講師を務めた方１４０人以上を登録しており、例会等の案内のほか、メンバーが関わる行事や活動等の情報交換のみならず、仕事の面でも人のつながりが役立っている。 ◆「わくわくパワーランチ」では、障がい者就労支援事業所の取組を応援する観点から、同事業所が製造・販売するお弁当を食べながら、メンバー各自の業務や自主活動等について２分間スピーチを行い、感性力やスピーチ力のスキルアップを図っている。
(2)チャレンジ性
◆夏合宿では、観光に携わる民間メンバーを中心に、受け入れする地元の方々と協働して企画する過程で、地域の人たちと交流しながら、飛び切りの食を味わい、景観や文化に触れることにこだわって、観光資源となる地域の魅力を掘り起している。『食べて学んで地域の方と交流！道産小麦に出逢う麦チェンツアー』や『麗（うるわ）し日高旅～日高の「食」と「文化」を極める～』など、旅行会社のツアーとして設定しており、地域発の観光開発につながるよう取り組んでいる。

夏合宿（アイヌ伝統料理のレクチャーと試食）

(3)協働性
◆夏合宿のツアーでは、観光に携わる民間のメンバーがコーディネーターとなり、受け入れする地元の方々と協働で運営している。合宿参加メンバーと一般応募参加者が一緒になって地域を巡り、地元の方々と交流する機会になっている。
(4)持続性
◆月例会では、メンバーが交代で、講師選定等の企画や運営をプロデュースできるようにしており、また、メンバーが友人知人に参加を勧めたりするなど、口コミで拡大している。 ◆道内の恵庭市や北見市などにも勉強会が広がっており、とび公北海道分校を通じて交流している。。

小学校へご奉公！活き活きと私ができること『おはなし隊の活動』

服部 しづ子（三重県 津農林水産事務所）

・地元小学校へ読み聞かせのボランテイア活動（平成 *15* 年～現在に至る）
・地域ふれあい集会への参加
・出前授業 テーマ『地域の達人』（平成２４～２５年）
「総合的な学習　国語」で当地区在住の作家の紹介とその作品の読み聞かせ
「総合的な学習　社会」で地域の歴史～徳川家康との縁と関連する絵本の読み聞かせ

活動に参加したきっかけと現在までのあゆみ

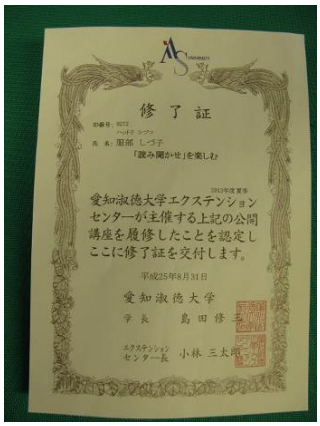
　私は、末っ子が小学校４年生の時、当時の担任の先生と意気投合し、初めて学校で子供達に読み聞かせをした。３人の我が子等がお世話になった地域の小学校に何か私でできることがあればと思い始めたのがきっかけである。

　当初は私達３名の児童の母親のみの取り組みで、内容は子供達が興味を持ってくれそうなお話や紹介したい絵本、紙芝居等を各自で選択し始業前や昼休みの 15 分間の読み聞かせでスタート。現在では１５名の地域の方たちが読み手に登録され活動を展開、また『おはなし隊』としては年に１回開催される学校行事『地域ふれあい集会』にも参画している。おはなし隊のメンバーは自主的で主体性があり、行事の事前の打ち合わせで、子供達に読ませたい、伝えたい本について検討し内容を組み立てている。私は介護のため参加できないこともしばしば・・・。そんな状況下でも、参加を強制されないため、気持ちを楽にして活動を現在まで継続しており、最近では9月２９日に出前授業を実施した。６年生を対象に徳川家康という歴史上の偉人と地域との接点を理解した子供たちの輝く目はとても印象的であった。私はこの活動を継続し地域の多くの方たちとの繋がりができた。

宝物　子供たちからメッセージ

アピールポイント

(1)成果・効果
＊「おはなし隊」の花の一期生
　私たち本好きな３人の同級生の子を持つ母親３名でスタートした読み聞かせの活動も現在は地域の高齢者や卒業した児童の保護者の加入もあり１４名に増加。地域ぐるみで取り組む学校行事『地域ふれあい集会』でも読み聞かせを実施。
[波及性]　私たち母親有志でスタートした読み聞かせの取り組みも今では『おはなし隊』の活動として学校関係者の中で認知されている。会員も増加し年代は３０から６０歳代と幅広い地域の皆さんの加入がある。
(2)チャレンジ性
＊音楽とコラボした読み聞かせ
　子供達が喜ぶ内容にするにはどうしたらよいか悩み市内で読み聞かせを定期的に開催されるグループの関係者に聞き取りしたり、実際に読み聞かせの場に参加させてもらった。そこでヒントを得て、楽器を取り入れた「音とお話がコラボした読み聞かせ」を思いつき早速、ピアノの指導者である知人の協力を得て楽譜、シナリオを作成。我が子も巻き込み６年生の音楽好き有志と一緒に１，２年生に読み聞かせを行ったことはよき思い出。
＊読み聞かせの知識、技術向上のための大学の公開講座を受講
　自分でやるべき取り組みの一つとして、読み聞かせのブラッシュアップのため某大学の夏期公開講座を受講。県外で読み聞かせを実践する仲間と出会い、彼女らの取り組みを通して、自分自身の今後のライフワークに読み聞かせを取り入れたいと改めて感じた。
(3)協働性
　上記の通り、この取り組みはたくさんの地域の方達や学校の先生の理解と協力があってこその活動。



公開講座修了証

南小読み聞かせ

(4)持続性
　この活動も今年で１３年目を迎える。「まず、やれることから」と始めたことだが、途中、介護で気持ちに余裕がなくなった。が、年１回の参加を目標に変更することで気持ちを楽にしたら、また、継続することができた。今後も地域の皆さんと繋がり読み聞かせを継続していきたい。

Tobidasu-Rengo

公務員よ！飛び出せ！やり出せ！頭出せ！